

琉球大学学術リポジトリ

中島敦「弟子」研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2013-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/27255

中島敦「弟子」研究

小澤保博*

A research note of the *Disciple* by Atsushi Nakajima

Ozawa Yasuhiro*

1

中島敦「弟子」典拠に就いて、佐々木充「中島敦の文学」(〔桜楓社〕昭和四十八年六月)に詳細な解説がある。村田秀明「中島敦『弟子』の創造」(「明治書院」平成十四年十月)は、前者の典拠研究を深化させている。最初に佐々木充「中島敦の文学」を踏襲し、「弟子」の依拠した典拠に就いて確認しておきたい。「弟子」は、全体が十六章で佐々木充研究は三十の段落に分けている。

一①(子路、孔子と問答し説破され、その門に入ること。)(「孔子家語」子路初見、「説苑」建本、「莊子」説劍、「史記」仲尼弟子列伝⁽¹⁾)

二②(説破された子路の孔子に対する畏敬の念)作者の創作。⁽¹²⁾

③(逆に、子路に対する孔子の感想)作者の創作。⁽¹³⁾

④(孔子の教えを子路がどのように受け入れはじめたか。)作者の創作。⁽¹⁴⁾

三⑤(孔子の悪口を云う者を子路が殴ること)作者の創作。⁽¹⁵⁾

⑥(同じような他の場面、孔子に叱られる子路の心理)作者の創作。⁽¹⁶⁾

四⑦(子路の瑟声に対する孔子の批評、それに対する子路の反応)作者の創作と「孔子家語」弁楽会⁽¹⁷⁾

五⑧(子路の師孔子に対する態度の特色)作者の創作。⁽¹⁸⁾

⑨(子路、胸中に秘密を持つこと)作者の創作。⁽¹⁹⁾

六⑩(当時の魯の政治状況、ならびに孔子宰相とな

り、子路片腕となって働くこと)「春秋左氏伝」昭公八年、「孔子家語」相魯、「春秋左氏伝」定公十二年、作者の創作。⁽¹¹⁰⁾

⑪(孔子魯を出て遍歴に旅立つこと)「孔子世家」「孔子家語」⁽¹¹¹⁾

七⑫(子路の抱えている大きな疑問について)「ヘンリー・ライクロフトの手記」秋、「史記」伯夷伝、「鳳鳥至らず。河、圖を出さず。已んぬるかな。」(「論語」子罕)作者の創作。⁽¹¹²⁾

八⑬(諸国遍歴中の孔子の心境)「ここに美玉あり。匱に韞めて藏さんか。善賈を求めて沽らんか。」「之を沽らん哉。之を沽らん哉。我は賈を待つものなり。」(「論語」子罕)、「褐(粗衣)を被て玉を懐く」(「孔子家語」「老子」三十三章)⁽¹¹³⁾

⑭(弟子の一人、子貢について)作者の創作。⁽¹¹⁴⁾

⑮(孔子と子貢・子路との問答)、前半「孔子家語」「説苑」弁物、後半「論語」(先進)⁽¹¹⁵⁾

九⑯(孔子、衛靈公に仕え南子に謁す)創作と「夫人、牖帷の中に在り。孔子門に入りて北面して稽首す。夫人帷中より再拜す。環珮の玉声、璆然たり。」(「孔子世家」)「子、南子に見す、子路説ばず」(「論語」雍也)⁽¹¹⁶⁾

⑰(衛の都を行く二台の車、子路の怒り、そして一行衛を去ること。)(「衛に居ること月余、靈公、夫人と車を同じうし、官者雍渠參乗し出で、孔子をして次乗と為らしめ、市を招搖してこれを過ぐ。孔子曰く、吾れ未だ徳を好むこと色を好むが如きものを見ざるなりと。ここに於てこれを醜とし、衛を去り曹に過る。」(「孔子世

* 国語教育教室

家「孔子家語」)「我いまだ徳を好むこと色を好むがごとき者を見ざるなり。」(「論語」子罕) (4117)

十⑩(孔子一行の遍歴の様子) 諸種の資料に見られる孔子一行の諸国歴訪。「頭は牖に窺ひ尾は堂に拖く」(「葉公竜を好む」莊子)「鳥よく木を擇ぶ。木豈鳥を擇ばんや。」(「孔子世家」)「春秋左氏伝」哀公十一年、「孔子家語」正論弁解) (4118)

⑪(陳・蔡の厄に遇う一行、その時に二つの挿話。) 前者の挿話は「孔子家語」説苑「雜言」、後者の挿話は「論語」衛靈公、「孔子世家」呂氏春秋「孝行覽慎人」、「莊子」雜篇讓王。(註19)

十一⑪(旅の途次、子路不思議な老人に遭うこと。) 「論語」微子、「孔子世家」に拠る。「湛々タル露アリ／陽ニ非ザレバ晡ズ／厭々トシテ夜飲ス／酔ハズンバ歸ルコトナシ」(「詩經」小雅湛湛の詩句)、子路の反論は「仕へずんば義無し。長幼の節、廢すべからずんば、君臣の義、之を如何ぞ其れ之を廢せん。其の身を潔くせんと欲して、大倫を乱る。君子の仕ふるや、其の義を行はんとするなり。道の行はれざるは、已に之を知れり。」(「論語」微子)の子路発言に拠る。(註20)

十二⑫(子貢と宰予の議論、それを聞く子路)「十室の邑、必ず忠信丘が如き者あり。丘の學を好むに如かざるなり。」(「論語」公治長)「巧言は徳を乱る。小を忍ばざれば、則ち大謀を乱る。」(「論語」衛靈公)、作者の創作。(註21)

⑫(子路の師への不満にまつわる挿話二つ) 第一の挿話「泄冶の正諫して殺されたのは古の名臣比干の諫死と變る所が無い。仁と稱して良いであらうかと。」比干と紂王との場合は血縁でもあり、又官から云つても少師であり、従つて己の身を捨てて争諫し、殺された後に紂王の悔寤するのを期待した譯だ。これは仁と謂ふべきであらう。泄冶の靈公に於けるは骨肉の親あるにも非ず、位も一大夫に過ぎぬ。君正しからず一國正しからずと知らば、潔く身を退くべきに、身の程をも計らず、區々たる一身を以て一國の姪婚を正さうとした。自ら無駄に生命を捐てたものだ。仁どころの騒ぎではないと。」

(「弟子」十二、「孔子家語」子路初見、「春秋左氏伝」宣公九年)、「古の土は國に道あれば忠を盡して以てこれを輔け、國に道無ければ身を退いて以てこれを避けた。」(「弟子」十二)「邦道あれば則ち仕へ、邦道なければ則ち卷いて之を懷にすべし。」(「論語」衛靈公)、「民僻多き時は自ら辟を立つることなかれ」(「弟子」十二、「孔子家語」子路初見、「春秋左氏伝」宣公九年)、「邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。あの男も衛の史魚の類だな。恐らく、尋常な死に方はいないであらうと。」(「弟子」十二)「子路行行如たり。再有・子貢侃侃如たり。子楽しむ。由が如きは其の死を得ず。然り。」(「論語」先進)。第二の挿話「孔子家語」(曲礼子貢問)「禮記」(檀弓下) (4122)

十三⑬(流浪の孔子に従い続ける子路の心境。)「天の未だ斯文を喪さざるや匡人それ予を如何せんや」(「弟子」十三、「孔子世家」、「論語」子罕)、「萬鐘我に於いて何をか加へん」(「弟子」十三、「孟子」告子章句上) (4123)

十四⑭(子路、孔子の推挽により衛に仕えること) 衛の国情、「孔子家語」致思。「恭にして敬あらば以て勇を懼れしむべく、寛にして正しからば以て強を懼くべく、温にして斷ならば以て姦を抑ふべし」(「孔子家語」卷之八・致思、「史記」仲尼弟子列伝)「教へずして刑することの不可」(「孔子家語」相魯)、「片言以て獄を折むべきものは、それ由か」(「論語」顔淵篇) (4124)

⑮(三年の後、孔子子路の領内に入り讃嘆すること。)「孔子家語」弁政 (4125)

十五⑮(亡命者・射に対する子路の処置)「春秋左氏傳」哀公十四年 (4126)

⑯(孔子と子路の間に、なおも存在する差異について。)「春秋左氏傳」哀公十四年、「論語」憲問、「孔子家語」正論解 (4127)

十六⑯(衛の国状説明)「春秋左氏傳」哀公十五年 (4128)

⑰(衛の太子蒯聵、クーデターを起し、子路奮戦して死すこと。)「春秋左氏傳」哀公十五年、「史記」衛廉叔世家 (4129)

⑱(子路の死を聞いて孔子悲しむこと。)

家語」曲礼子貢問、「禮記」檀弓上、「春秋左氏傳」哀公十四年、「史記」衛康叔世家、仲尼弟子列伝⁽⁴¹³⁰⁾

2

運命は予兆を以て訪れるが、取り分け不孝の前兆は予言的な兆候としてその片鱗を垣間見せるものだ。昭和初期の神秘思想の隆盛の中で小林秀雄は、ベルグソンに熱中して、奇跡の衝撃波で夫の戦死の光景を脳裏に感知する仏蘭西人妻の経験を披露している。孔子は、子路の悲惨な未来を透視して感慨を漏らす。

「邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。あの男も衛の史魚の類だな。恐らく、尋常な死に方はしないであらうと。」(「弟子」十二)、孔子の抱いた予兆をなぞるかのように半世紀程の時間の流れの結末に子路は、非命に倒れる。「全身脛の如くに切り刻まれて、子路は死んだ。」(「弟子」十六)、師の予言の如くに子路は、孔子門下の最も忠実な弟子として儒教の教えを実践して死に就くのである。故郷である魯にあって衛の政変を即聞した孔子は、独自の弔問を忠実な弟子に対して示して見せた。「子路の屍が醜にされたと聞かや、家中の鹽漬類を悉く捨てさせ、爾後、醜は一切食膳に上さなかつたといふことである。」(「弟子」十六)、身近な弟子も遠方に勤務すると記憶は、断片的な破片に成る。常用の食膳肉の断片が、弟子の肉体の具体的な記憶と重なる残酷な場面である。⁽⁴¹³¹⁾

意識が肉体を遊離して自己存在が彷徨する主題は、中島敦作品で頻繁に見られる課題である。それは多く夢で予兆という象徴的な形で、作品中に表出されている。肉体が行動するも意識が、伴わない苦痛を繰り返して作品で書き続けた。その遠因は実母を喪失した儘、父の転勤で生活不如意な外地を転々して成長した為ではないかと思われる。「李陵」は、戦時下の皇軍兵士の運命を紀元前、支那の歴史に仮託して描いた一篇の叙事詩である。辺境の匈奴の地で生活する事を強いられた漢の将軍が、時間の推移の中で意識がそれを拒みながらも、肉体が同化して行く過程を痛みを以て記述したものだ。「古譚」(「木乃伊」)もその種の問題に取り組んだ寓話的な商品である。肉体を遊離した魂が、別の肉体に宿り波斯の一兵士として埃及に遠征し、自己の以前の肉体に数百年を閲して再会する話であ

る。この作品でも彼の運命は、予兆を以て彼に前世の存在を知らしめている。波斯で生まれ育った彼に埃及の見知らぬ風景は、馴染みの懐かしいものに感じられるのである。こうした彼の不信と懐疑は、地下の墓で一体の木乃伊を目撃して氷解する。「俺は、もと、此の木乃伊だつたんだよ。たしかに。」という独白が、為される。「木乃伊」が、寓話的、象徴性を帯びた作品で作者の生の声からは遠い。しかし、「光と風と夢」では、R. スティヴンスンは南洋サモア諸島のアピア街道を酔って彷徨し、意識が混濁して生まれ故郷のエディンバラの自宅に向かっている錯覚を覚える。「ここはアピアだぞ。エディンバラではないぞ」と意識は覚醒を求めながら、感覚が故郷の自宅に向かう道を歩む錯覚を消し去れない。

3

「古俗」(「盈虚」「牛人」)二篇も同様の予兆の見られる作品である。「弟子」で子路の無残な運命を師の孔子が予見したように、「牛人」では主人公の魯の叔孫豹は、自己の悲劇的な運命の兆候を夢で知らされる。人間の予兆の運命は、残念ながら幸福の前兆は予兆で顕示さない。幸運は無く、不孝な運命のみ予兆の兆候を垣間見せるのである。魯の叔孫豹が、隣国斉に亡命した時に一人の美女と関係を持った。斉で結婚して二人の息子を得て後、再度魯に帰還する直前予兆の夢を見る。「四邊の空気が重苦しく立竝め不吉な豫感が静かな部屋の中を領してゐる。突然、音も無く室の天井が下降し始める。極めて徐々に、しかし極めて確實に、それは少しづつ降りて来る。」「寝てゐる眞上の天井が、何時かの夢の時と同じ様に、徐々に下降を始める。ゆつくりと、併し確實に、上からの壓迫は加はる。逃れようにも足一つ動かさない。」、前者の場合は、牛男の尽力で危機を脱するも後者の場合は、牛男は傍観して救いの手を差し伸べてはくれないのである。最終的に魯の叔孫豹は、嫡出子二人の子供を庶子に依って失い、自身も餓死させられる。⁽⁴¹³²⁾

「盈虚」は、衛に靈公の太子蒯聵の亡命と復讐そして非業の死を描いている。自分の息子輒に衛公の地位を奪われた蒯聵が、亡命生活十数年の年月を経て現衛公とは異腹の息子である公子疾と蒯聵の姉の情夫である湫良夫の二人の側近を伴い、衛

公に復権する過程での、悲劇である。公子疾に依り側近の渾良夫を殺害されて後に崩壊は、自己の悲劇的な運命の予兆を夢で見る事に成る。「『見えるわ。見えるわ。瓜、一面の瓜だ。』……小さき瓜を此の大きさに育て上げたのは誰だ？ 惨めな亡命者を時めく衛公に迄守り育てたのは誰だ？ ……『俺は渾良夫だ。俺に何の罪があるか！ 俺に何の罪があるか！』、結局この予兆の夢に沿う方向で、衛公である崩壊は非業の最期を遂げる。⁽⁴¹³⁾

「弟子」という題名には、作者の意図が反映している。「李陵」の方は、本来「漠北悲歌」とあるべきを深田久弥により抽象的な、主観を排した題名に変更されたのである。一篇の作品的な意図は、在るべき師弟関係を具体的に典拠に依拠しながら描き切った。子路は、必然性があって孔子門下に成ったのではなく、偶然から不用意に偶発的にそうなった訣である。国家社会主義独逸労働党などは、反共産党の協同戦線で結束した利権集団である為、目標が雲霧消してしまうと最後まで伯林の地下壕に留まったのは、主義主張に無縁なニヒリストである宣伝大臣一人に成ってしまった。人為的な孔子学園内部でも、中心にいて采配を振るい、伝統と教育を後世に残す事などから無縁な人物、顔回などと遠い位置にあった人物である子路に焦点を当てた事が、作者の独創と言えそうだ。政治的な利権を求めて人為的な人間改造の場合は、組織が、団体が、崩壊する同時に精神構造も内部から分裂してしまい統一的な人格も崩れる。個人的な経験でも、理論と実践の長期に亘る共産党の思想訓練も日々の営みの持続で安易に崩れるものだ。

人生の良き教師であった孔子は、部外の無法者である子路の教育を強制しようとはしなかった。故に子路は、常に孔子に対して違和感を覚え、内心の懐疑を隠そうとしなかった。孔子学園の校風に合わない子路の発言を間違いなく中島敦は、依拠した漢籍類の中から拾い上げている。共産党の鉄の規則の内部では、問答無用で肅清の対象に成る言辞を作者は拾い上げている。「請ふ。古の道を釋てて由の意を行はん。可ならんか。」「はある哉。子の迂なるや！」（「弟子」五）、国家社会主義独逸労働党が、さらに人間の魂が神からの借り物であるという立場に立つカトリック教会が、さらには日本共産党が徹底して粉碎した個人の尊厳の中核を為

す精神の核を破壊する事に孔子は、妥協を見せている。そして、最小限度の個人的な意思に依り譲歩を促すばかりである。孔子学園に溶解し得ぬ自身の心の隅の刺に就いて子路自身は、以下の如くに説明している。

「だが、これ程の師にも尚觸れることを許さぬ胸中の奥所がある。此處ばかりは譲れないといふぎりぎり結著の所が。即ち、子路にとつて、この世に一つの大事なものがある。そのものの前には死生も論ずるに足りず、況んや、區々たる利害の如き、問題にはならない。狭といへば少々軽すぎる。信といひ義といふと、どうも道學者流で自由な躍動の氣に缺ける憾みがある。そんな名前はどうでもいい。子路にとつて、それは快感の一種のやうなものである。兎に角、その感じられるものが善きことであり、その伴はないものが悪しきことだ。極めてはつきりしてゐて、未だ嘗てこれに疑を感じたことがない。孔子の云ふ仁とはかなり開きがあるのだが、子路は師の教の中から、この単純な倫理観を補強するやうなものばかりを選んで攝り入れる。」（「弟子」五）、子路の告白の個所を粉碎出来れば、野生の自然児である子路を孔子教徒にする事が出来る。吉行淳之介の言及では、国家社会主義独逸労働党はこの心の核を打ち砕く為に科学的、人工的な特殊洗脳教育を為した。しかし、映画「ホロコースト」では、自分の部下による民間人の大量殺人を目撃して、ハイリッヒ・ヒムラーは卒倒している。

個人的な経験でも、隣室の研究室で行われた日本共産党の思想訓練を三十年間目撃して来たが、多くの学生の中には卒業後警察官に成って師の実践教育を無駄にした者もいる。オウム真理教もかくも厳格、過酷な人間改造にも関わらず脱退者は、後を絶たない。人間精神の深層にある心の核を粉碎しない限り、半世紀に及ぶマインド・コントロールも所詮は無駄になるだろう。日本共産党の組織細胞と成って果敢に生き、脱党後は基督者の道を歩むことに失敗した太宰治も子路と同様の発言をしている。「私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれてゐる。その文字は、何であるか、私にもはつきり讀めない。」（太宰治「父」と言うものである。孔子の言動に違和感を抱きながら、最期は命を賭して師である孔子の教えを実践して死んで見せる所が、「弟子」の名作たる所以で

ある。「見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」（「弟子」十六）と叫んだ時に子路は、胸中に太宰治流に云えば、胸の奥の白絹の文字が解読出来ない儘であった。

子路の胸中の彼自身の胸中の核を温存させた儘、彼を孔子教徒として絶命させた孔子の教訓語録は、以下の如くである。「巧言・令食・足恭なるは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。怨みを匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。」（「論語」第五）「志士仁人は、生を求めて以て仁を害する無し。身を殺して以て仁を成す有り。」（「論語」第十五）「中行を得て之と与にせずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所有り。」（「論語」第十三）「敬にして禮に中らざる、之を野と謂ふ、恭にして禮に中らざる、之を給と謂ふ、勇にして禮に中らざる、之を逆と謂ふ。」（「禮記」第二十八）「信を好みて学を好まざれば、其の蔽や賊なり。直を好みて学を好まざれば、其の蔽や絞なり。」（「論語」第十七）、何れも原文を作者は恣意的に変えている。

孔子の教義に終始一貫齟齬を覚え、納得出来ない面を意識しながら一代の快男児が上記の孔子の言動に挫を掛けられて、最期は儒教の根本教義に殉じた。この子路のある種の殉教的な死に拠って春秋戦国にあったの空理空論が、社会を動かす実践的な思惟と変貌するのである。吉田松陰の自爆的な刑死が無ければ、徳川幕府は現在に至っても変貌して、日本社会の封建的な側面と共存していた筈である。井伊大老の暗殺から、僅か八年で二百六十年に及び日本人を統治してきた強権が打倒された事を考えれば、空理空論を唱えた者が痛恨の死を以て訴えた場合の衝撃度が、理解出来る。ドストエフスキー「悪霊」では、教室での無神論革命家の私刑を描きながら、後年の露西亞革命を先取りしている。吉田松陰の刑死の日付に合わせて自殺した三島由紀夫は、自分一個の死が、日本に招来するかも知れぬ共産革命に対する防波堤になるという信念で死んで行った筈である。孔子の教義に殉じた子路の天性を作者は、以下の如くに説明している。「大きな疑問が一つある。子供の時から疑問なのだが、成人に成つても老人になりかかつて未だに納得できないことに變りはない。それは、誰もが一向に怪しもうとしない事柄だ。邪が榮え

て正が虐げられるといふ・ありきたりの事實に就いてである。」（「弟子」七）、支那社会の現実の流れに馴染む事の出来ない一個の男の死で儒教が始まった。天皇親政による帝国日本の再生の為決起した陸軍将校、祖国防衛の為に死んだ神風特別攻撃隊の霊が、昭和天皇の「人間宣言」に呪詛の言葉を投げかける「英霊の聲」（「なごてすめろぎは人間となりたまひし。」）は、神格天皇の存在が、靖国神社に数倍する威力で共産主義革命の反指定になると進言している訣である。

4

長期に亘り学生運動を指導して、自己の理念を永久革命の平和主義者と自覚し、晩年自分が先導した学生に引きずり出され自己批判を強要されたのは、丸山真男である。「弟子」で描かれた子路も同種の間人で有り、現状に満足しない種類の人間である。「善人が窮極の勝利を得たなどといふ例は、遠い昔は知らず、今の世では殆ど聞いたことさへ無い。何故だ？何故だ？大きな子供・子路にとつて、こればかりは幾ら憤慨しても憤慨し足りないのだ。彼は地團駄を踏む思ひで、天とは何だと考へる。」（「子路」七）、前時代周の民族の古層にあった良質の部分の集大成が、儒教であるなら、一身を擲って儒教を儒教たらしめた子路は、永久革命の儒教主義者である。二千年を閲して、支那社会を制覇し、支那人の民族的な気質と化した儒教に挑戦したのは、秦の始皇帝が最初で、毛沢東は二番煎じである。孔子思想を打破して、支那人の体質改造を目論んだ毛沢東は、孔子学園の子路を思わせる。そして、文化大革命の中止を命じた鄧小平とその一派は、さながら孔子学園の温厚な弟子達の風貌に重なる。

諸国を行脚する孔子の基本方針は、「述べて作らず。信じて古を好む。窃かに我を老彭に比す。」（「論語」述而第七）、と謂うものである。高い理想故に戦国の諸侯は、誰も孔子一行に対して役職を提供しない。「孔子の道を実行に移してくれる諸侯が出て来ようとは、今更望めなかつた」（「弟子」十三）という現実の中で孔子の気概は、「萬鐘我に於て何をか加へん」（「弟子」十三）というものである。「唯だ女子と小人とは、養ひ難しと為す。之を近づければ即ち不遜なり。之を遠ざければ則ち怨む。」（「論語」微子第十八）という有名な孔子の言辞から、阿川弘之

「論語知らずの論語読み」(「講談社」昭和五十二年八月)では、孔子同性愛説の仮説を出して、指南役の駒田信二に確認を求めている。孔子学園は、男だけの精神錬磨の道場であって、女との交流が参入したら崩壊する体のものである。男達の切磋琢磨の精神道場は、明らかに日本の旧制高等学校、帝国大学の肉体と学問を鍛える男だけの学制内部に取り入れられた。私が、個人的に研究の触手を伸ばしている芥川龍之介、堀辰雄、中島敦等の作家はこの種の経歴を有する典型の人達である。彼等は、常に外部の女達からの誘惑の陥穽に落ちる危険を秘めた存在である。現在の日本では、絶滅したこれらの人達の訓導を受けた最後の世代が、私である。私を研究職に導いた二人の教授も同種の経歴の人達で、共通項は独逸語、独逸文学に対する偏愛である。彼等の存在を回顧して、私は今でも趣味的に独逸語の学習を繰り返している。「弟子」は、狂乱と荒廢の支那の良質の個所をすくい上げて流麗に記録された孔子の一代記である。混沌の春秋戦国の支那で理想を掲げて流浪する孔子を描きながら、一方で中島敦は「牛人」「盈虚」「妖氛録」⁽²³⁾等の戦国の現実を扱った作品も残している。

(註1)以下「弟子」註は、佐々木充「中島敦の文学」の先駆的な研究に拠り作品典拠を確認し、多少の私見を加えたい。「子路(再)拜して曰く、敬みて教を受けん」(「孔子家語」子路初見、「説苑」建本)「仲由、字は子路、卞の人也。孔子よりも少きこと九歳。子路、性鄙しく、勇力を好み、志伉直にして、雄雞を冠し、豕豚(牝豚)を佩び、孔子を陵暴す。孔子、禮を設け、稍々子路を誘ふ。」(「史記」仲尼弟子列伝第七)「吾が見る所の劔士は、皆蓬頭、突鬣、冠冠、曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らして而して語、難し。」(「莊子」説劍)。孔子の弟子の子路入門の粗筋を「孔子家語」に借り、子路の風体を「史記」に依拠し、風貌を「莊子」から借用した。「我、長劍を好む。」「學、豈、益あらんや。」と傍若無人の振る舞いで公言した者が、最期「見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」と言って孔子の教えを体現して人生を終わる一篇の物語が、「弟子」である。この作品は、孔子の実践的な教訓である処世の術が解り易く叙述されていて、礼は形から入るという教訓的な教え、儒教を容易に解き明かしている。「三尺下がつて師の影を踏まず」というのは仏教の作法であるが、儒教の教えと一体化

して中国の社会を後退させたと考えた毛沢東は、文化大革命で教室を戦場と化した。支那全土で教師は、共産党主席に忠実な紅衛兵により集団暴行の人民裁判に駆り出された。乱暴者の子路が、長い年月を経て孔子の教えの忠実な実践者に成った事の反対を行った訣である。「青年の聲や態度の中に、餘りに稚氣満々たる誇負を見たからである。血色のいい・眉の太い・眼のはつきりした・見るからに精悍さうな青年の顔には、しかし、何處か、愛すべき素直さが自づと現れてゐるやうに思はれる。」「馬に策が、弓に檠が必要なやうに、人にも、その放恣な性情を矯める教學が、どうして必要でなからうぞ。匡し理め磨いて、始めてものは有用の材となるのだ。」、この孔子の認識の過程を踏んで子路は、最期に孔子門下の一典型として最期を迎えるのが「弟子」一篇の粗筋である。共産党主席、人民中国の神は「弟子」で子路が辿った孔子からの無言の洗脳教育の逆をやった訣である。

「弟子」一篇に描きつくされた子路の物語は、好個の青年が無言の教化に依り最後は命がけて孔子の教えを實踐して死んで行く、感動的な洗脳教育の過程を記録したものだ。現在でもカトリック教会では、戦闘的なイエスの使徒を養成する為に基督の辿った苦難の人生を修練で課している。人工的な断食による肉体と精神の衰弱により、悪魔の誘惑を招来させての精神の鍛錬である。この洗脳教育は、明らかな証拠では第三帝国の親衛隊の思想訓練に適用され、共産党員の洗脳教育に転用された。民間人の大量殺人を平然と組織的、暴力的に持続的に為すための強固な意志は、肉体と精神を併用で鍛える長期に亘る国家的な洗脳教育が必要である。オウム真理教が世間を騒がせていた時に丸山真男は、天皇を頂点とする戦前の日本がこの特殊な宗教集団、殺人を合法化した狂気の宗教集団と同一であると発言している。戦時下の独逸で共産主義国家で繰り返される洗脳教育が、一般の青年の不安解消に貢献し強固な実践能力を駆使する事に有効であった事を竹山道雄の著作は指摘している。

実母の愛の希薄な人生を生きた太宰治は、日本共産党の細胞として生きた時期、虚無は影を潜めていた。共産党組織からの離脱の時期と太宰治の基督教接近は、連続している。聖書研究誌「聖書知識」を毎月講読仕出したのは、日本共産党細胞からの離反による。「聖書知識」(塚本虎二主宰)の基督者への道は、なだらかな根気と忍耐を強要する緩やかな洗脳教育である。容

易に基督者への安心立命の境地に達し得ない事から、太宰治の虚無の意識が芽生えて来た。自己の肉体と意思、揺れ動く精神を全身で受け止めてくれる絶対者を希求し、達し得ない虚無を自分でも正確に把握し得ないと言っている。「私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれてゐる。」(「父」昭和二十二)。

「弟子」は、春秋戦国時代を舞台に師弟愛に満ちた孔子軍団、一つの秘密組織を好意的に描き切った一篇の佳作である。典拠である「春秋左氏傳」「史記」には、動乱の古代支那の殺戮、裏切りの実態が即物的に記録されている。過酷な実態から目を逸らし、美しい洗脳教育の実態を成功裏に描き切ったのは中島敦の手柄である。「弟子」の裏面である古代支那の惨憺たる実態に就いては、中島敦「牛人」「盈虚」「妖氛録」に素材を生かした赤裸々な記述がある。春秋戦国でも孔子とその弟子の私的な派閥は、その理想的な形態で問題視されていた訣で秦の始皇帝の焚書坑儒は、国家的な規模による反撃である。「弟子」で描かれた個性に沿った理想的な教育制度こそが、支那社会の元凶であると判断した人民中国の毛沢東は、権権獲得後に「われわれのこの党を罰する」文化大革命を発令した。私的な教育集団、孔子とその弟子達の言動とその愛を背景とした秘密結社こそが、支那社会の後退の理由であると判断した訣である。

「罪と罰」「カラマーゾフの兄弟」に親しみ、皇帝とその権威を支えるロシア正教会に帰依するロシア民衆の宗教心の絶対的な事を認識していた私は、既存の権威を打倒するロシア帝国の内戦の記録「静かなドン」「ドクトルジバゴ」を通読して、過大な民衆の宗教心が民族と國家に過酷な洗礼を齎したという素朴な感想を抱いた。支那社会に就いては、個人的に接した中国人は誰もが個としては日本人一般より、数倍優れているという私的な感想を持っている。支那社会の束縛を脱して個人として、勇猛果敢に異国に生き抜く支那人の個性を背後に支えているのが儒教であると判断した共産党主席は、その支那社会の基盤を破壊しようとしたのである。毛沢東は、現代に蘇った秦の始皇帝であったと認識する事は可能だ。人民中国の成立が、労働ロシア成立程の目に見える悲劇を齎さなかったのは、中国国民党の政権中枢にいた人々を数百万規模で吸収する台湾の存在が大きかった。殺戮と肅清の波を逃れて国外に逃亡した白系ロシア人の悲劇の生活実態を仄聞しているのは、私などが最後の世代であろう。

高校時代の数学教師は、独逸との戦役の武勲の象徴である露西亞皇帝拝領の勲章を差出して、一飯の食事を強請った亡命貴族の思い出を語った。故人となった国語学の教授は、^{ハルビン}ハルビンで特務機関員として短期で露西亞語を習得した体験を語り、戦時下での露西亞貴族との愉快的な交流を聞かせてくれた。亡命露西亞貴族の女との私的な親交を持たなかった理由を無遠慮に問い質す私に、白系露西亞貴族の女達の惨憺たる悲惨な状況を聞かせてくれた。井上ひさし「一分ノ一」(「講談社」上、下巻)は、米英中ソに分割統治される終戦直後の日本を舞台にした架空小説である。ソ連侵攻が、米英より早かったら現実の問題であったが、ソルジェニーツインの言う「赤い車輪」が回転し始めてからでは全ては手遅れである。個人的には、共産主義國家となった祖国日本から亡命し、辺境の南米辺りで天皇陛下から拝領の勲章を差し出して、一飯の恩義を受けるよりも赤軍との戦闘で人生を終わりたいと思っている。宗教の濃厚な事が、儒教の強固な事が反指定として共産主義を生み、暴力革命の温床になる。こうした個人的な見解を国共内戦時、上海の街頭で撃ち殺される国民党要人と埠頭から国外に脱出する神父や修道女の実写フィルム of 感想を添えて、現役の修道女に語った思い出がある。支那の教会で神に奉仕する数人の神父や修道女の生活を支える為に、数倍の使用人の存在がある。奉仕する使用人を主人にする為の暴力装置の考案者が、毛沢東であったと言える。J・G・バラードの自伝小説「太陽の帝国」には、帝国日本の侵攻後上海の富裕な英国租界の少年が使用人に殴られる場面が登場する。

(註2)「濶達自在、些かの道學者臭も無いのに子路は驚く。この人は苦勞人だなど直ぐに子路は感じた。可笑しいことに子路の誇る武藝や膂力に於てさへ孔子の方が上なのである。」(「弟子」二)、孔子の人物に対する中島敦の造詣の深さを感じさせる。前者は「^{たいさい}太宰我を知れるか。吾^{わが}少かりしとき賤し。故に鄙^{びじ}事に多能なりき。君子は多ならんや。多ならざるなり。」(「論語」子罕第九)の中島敦流の書き換えである。後者は、「天、徳を予に生ぜり。桓^{かん}魑^ち其れ予を如何せん。」(「論語」述而第七)「文王既に没したけれども、文^{ぶん}茲^{こゝ}に在らざらんや。天の將^{まさ}に斯^{こゝ}の文を喪はさんとするや。後^{こう}死^しの者、斯^{こゝ}の文^{ぶん}に与^あすか^かを得ざるなり。天の未だ斯^{こゝ}の文を喪はざるや、匡^{きやう}人^{びと}其れ予を如何せん。」(「論語」子罕第九)の孔子の発言を視野に入れて、文弱の徒であった作者の自己

認識から記述された個所である。人生を生き抜く実践倫理を説いて諸国を行動する者の実態を余す事無く把握している。作者のこの種の認識は、会田雄次「アロン収容所」(「中公新書」昭和三十七年十一月)で描かれた英国将校で証明され、文学方面では弱さを演じて殉じた芥川龍之介、太宰治、さらに遠く北村透谷、二葉亭四迷も実物は弱さとは縁遠く、頑強な肉体を持った行動派知識人である。

子路の視点から観察する孔子は、以下の如くである。「力千鈞の鼎を舉げる勇者を彼は見たことがある。明千里の外を察する智者の話も聞いたことがある。」「潤達自在、些かの道學者奥も無いのに子路は驚く。」「放蕩無頼の生活にも経験があるのではないかと思はれる位、あらゆる人間への鋭い心理的洞察がある。」「ここで中島敦が孔子と比較する存在として指摘しているのは前者が項羽であり、後者は諸葛孔明であろう。前者は前漢時代で、後者は三国時代で時間的な隔たりは大きく遥か後世の事跡であるが、作者の思考の内部では矛盾はなかったと思う。孔子の実践的な人生哲学、儒教を道學者の部類の教えに固定化したのは、後世の「論語」の訓詁学の責任であるという中島敦の認識がある。孔子の教えの最初の殲滅者は、秦の始皇帝であるが、後者を信奉し孔子の敵対者に成ったのは人民中国の共産党主席である。毛沢東が攻撃し、粉碎したのは孔子の教えを形骸化して支那社会を停滞させた元凶である朱子であったかも知れない。支那社会の停滞は身分制度による分業と階級制度であると考え、文化大革命を発火させたのであろう。自分の後継者林彪が、暗殺を企てて国外に逃亡した折の共産党主席の発言は、さながら危機に陥った時の上記の孔子の発言を思わせる。「雨は降るもの、娘は嫁に行くもの、どうしようもない、好きにさせるがいい!」。一般論として孔子が「論語」で見たあるべき人間社会の実態は、支那本国よりも日本で実現されたという意見がある。大学のような閉鎖社会での故人となった教授の弟子達による追悼文を読めば、さながら日本社会は孔子が望んだ理想の君主国である。その美辞麗句は、読む者をして赤面させる程の言辞である。大学の貴公子、学会のプリンスと呼称された人々も自己の属する組織を離れ、別社会に飛び込んだ場合、その行動は野生の猿と変わらない。個人的には、在住の支那、韓国の人間に人格の卑小さ、二重人格を意識した事は無い。他国で生きる彼等は、何れもが草原を疾駆する野生の虎の威厳

がある。個人としての日本人は、彼等在日の支那、韓国の人間に及ばないという感想を持っている。

(註3)「禮と云ひ禮と云ふ。玉帛を云はんや。樂といひ樂と云ふ。鐘鼓を云はんや。」(「論語」陽貨第十七)、礼は形から入って行く事での末梢に囚われる事に対する孔子の反省に子路は、賛同した。「上智と下愚移り難い」(「論語」陽貨第十七)は、中庸を尊ぶ孔子の言である。両極端の個性たる子路の人格を孔子だけが、理解している。「孔子はこの剽悍な弟子の無類の美点を誰よりも高く買つてゐる。それはこの男の純粋な没利害性のことだ。この種の美しさは、この國の人々の間に在つては餘りにも稀なので、子路のこの傾向は、孔子以外の誰からも徳としては認められない。むしろ一種の不可解な愚かさとして映るに過ぎないのである。」(「弟子」二)、子路の独自の個性を以上の如く認識した事が、漢籍に親しんだ日本人としての中島敦の独創である。支那人に稀な子路の「純粋な没利害性」に気付いたのは孔子一人であり、「二・二六事件」の独自性に気付きその独自の「純粋な没利害性」を友人三島由紀夫に喚起させたのは、米国人のドナルド・キーンである。最近の識者の論評に拠れば、「二・二六事件」の陸軍将校も自分で権力を行使したかったからだという指摘もある。しかし、三島由紀夫「二・二六事件」三部作(「憂国」「十日の菊」「英霊の聲」)は、自己犠牲の上に皇国再生を願望したという理念で記述されている。戦後日本の道徳の衰退は、生命を棄てて國家に殉じた者の栄光を昭和天皇が「人間宣言」で裏切ったからであると言う趣旨である。しかし、三島由紀夫「英霊の聲」の呪詛の言葉は、確実に昭和天皇に伝わっていた。自分の「人間宣言」は、明治大帝の「五箇条の誓文」の文言の連続であると語っているからである。三島由紀夫没後十五年後、昭和の終わりに昭和天皇と香淳皇后は、「八月十五日」のお題で以下のお歌を残している。「この年のこの日にもまた 靖国の みやしろのことに うれひはふかし」「やすらかに ねむれとぞおもふ 君のため いのちささげし ますらをのとも」。私見では、戦後日本の道徳的な荒唐は、死地に赴く事を命令した陸軍、海軍の高級参謀が、敗戦後平穩な日常に戻り、畳の上で往生し、なかんずく回想記などを残した事が原因である。道教研究の先駆者である福永光司は、故郷大分県中津の駅頭から支那大陸に出征する折の感傷的な一文を沖繩の新聞に寄稿していたが、読後感を伝えた折、道教のような迷信を学問的に研究する動機を

語ってくれた。敗戦後、戦時の高揚が沈下した後に国民党により処刑された日本軍人より、対日協力の廉で銃殺になった支那人の方が、死の覚悟で勝っていた。その根幹に道教の存在がある事に気付いたからであるというものである。

子路「純粋な没利害性」を孔子だけが認識している、この弟子の性格は支那では稀である。ここには、作者である中島敦の当時の支那に対する一日本人としての認識が横たわっている。支那では稀な「純粋な没利害性」という理解の背後に、滅私奉公の日本人の生活感覚が横たわっている。民族の気概の問題であるが、戦後日本に平和と安定を齎した「日米安全保障条約」は、劣悪な装備で圧倒的な装備の米軍に立ち向かった数百万皇軍兵士の奮闘であろう。北清事変での日本軍兵士の振舞いが、日英同盟を齎したのと同じ原理が働いた。「蒋介石秘録」に拠れば、敗戦直前迄大陸で奮闘する日本軍人に対する愛憎半ばする国民党側からの記述がある。十数年に及び大陸で死闘を演じた当事者が、退場して策略と謀略の共産党政権が誕生した事が、戦後の中国問題を難しくしている。「皇軍がなかったわれわれは政権を奪取することができなかったろう。」と毛沢東は、語っている。歴史的な眺望をすれば、国民党政権では、国家に蔓延る古い支那人体質を一掃出来なかったという事である。支那人の体質改善の為に平時に七千万人を超える自国民を抹殺する策略、謀略、陰謀の装置が必要だった。「ヘロデは或大きい機会だった。かう云ふ機会は暴力により、多少の^{てすう}手数を省く為にいつも我々には必要である。」(「西方の人」八)、策を弄した共産党が政権奪取に成功した事は、戦後日本人の体質、気概に甚大な影響を与えた。

(註4)「師の言に従つて己を抑へ、兎にも角にも形に就かうとしたのは、親に對する態度に於てであつた。」(「弟子」二)、形式主義を厭う子路が礼の道を実践したのは親孝行という身近な事例からであつた。以下の「弟子」(二)の記述には、子路に仮託された中島敦の実父に対する気持ちの推移の率直な反映がある。示唆を与えたのは「死者を知るありと言わんとすれば、將に孝子順孫、生を妨げて以て死を送らんとすること恐る。死者を知るなしと言わんとすれば、將に不孝の子其の親を棄てて葬らざらんとすることを恐る。」(「孔子家語」説苑「弁物」の孔子言行録である。

「形に就かう」、つまり孔子の教えは日々の儀礼の積重ねである。そしてこの儀礼そのものが形骸化し、最

終的に支那社会を沈下させたと共産党主席は考えた訣である。儒教の実践は、「形に就かう」という意思から始まる。これに就いて作者は、自身の体験を踏まえて以下の如く解説して見せた。「我儘を云つて親を手古摺らせてゐた頃の方が、どう考へても正直だつたのだ。」、形式的な親孝行が真心を伴わず、両親に心痛を与える方が親孝行の真実に迫っている、という中島敦の理解である。形が、先行して実質が伴わない美辞麗句は、現在では日本共産党の教育方針に受け継がれている。具体的には、三十年間一本の論文も執筆出来なかつた者が、百名を超える同僚の業績審査を為すが如く、あるいは完璧に研究能力の無い教員が、毎週学生に過酷なる研究発表を強いるが如きである。好意的に解釈すると融通無碍のこの種の処世の才が、何処から派生したか。「一面抵抗、一面交渉」の信念で南京政府を樹立した国民党分派の汪兆銘の行動規範が、影響しているかも知れない。南京政府の末期に延安の劉少奇は、同調して共同戦線の申し込みをしている。日本帝国降伏後、共産軍の装備劣悪の現状を把握していた毛沢東は、重慶で蒋介石に隷属する証書を書き残している。共産軍の装備が、充実して来ると誓約書は反故に成つた。毛沢東との重慶での朝食後、蒋介石は以下の感想を記した。「共産党は不誠実で有り、卑劣であり、畜生以下である」。共産党の表裏の乖離を無くそうとしたのが、新左翼運動であつたという認識が、個人的に有る。マルクス主義学生同盟中核派の活動家として自殺した奥浩平の遺稿集「青春の墓標」は、今も共産党の在るべき理想を私に問い続けている。ナポレオンは、海外遠征には常に「若きウェルテルの悩み」を携帯したそうだが、私も単身の離島巡りに「青春の墓標」を持参した記憶がある。「形に就かう」という儒教の社会規範が、表裏のある世の中を作つたと言える。強気を挫き弱気を助けるのが、泉鏡花文学の神髄である。この反対なのが、泉鏡花本人の出处進退であつたという勝本清一郎の一文を読んだ記憶がある。この種の社会の二面性にいかに対処するか、勝本清一郎はこれに就いても言及している。「雁一森嶋外一」(クラウゼヴィッツ「戦争論」との関係)に拠れば、独逸留学に赴く帝国大学の知的エリートの思いを寄せる女を、しがない高利貸しが占有する話である。隠花植物、黴のような人間に対処する為には自己の存在を卑小にする事である。私的には、勝本清一郎の提言を受入れて自存自衛の為に長期に無能を演じて生存を保つた体験を持つ

ている。

(註5)「古の君子は忠を以て質となし仁を以て衛となした。不善ある時は則ち忠を以て之を化し、侵暴ある時は則ち仁を以て之を固うした。腕力の必要を見ぬ所以である。兎角小人は不遜を以て勇と見做しがちだが、君子の勇とは義を立つることの謂である」(「弟子」三)は、「孔子家語」(好生)、「説苑」(貴徳)に依拠する。三好行雄脚注に拠れば「(昔の君主は忠(まごころ)を自分の実質とし、仁(いつくしみの心)をもって自分を守った。他人が不善をおこなうときは、真心でこれを止し、他人から侵されようとするときは、仁の心によってかく身を守った)の意」。「昔、昔、と何でも古を擔ぎ出して今を貶す。誰も昔を見たことがないのだから何でも言へる譯さ。」(「弟子」三)、孔子の基本的な思考を、過去を破壊し未来を思考する人民中国の共産党主席が批判をしたのは最近である。「批林批孔」運動、前者は毛沢東の後継者林彪で後者は孔子に擬された周恩来である。理想を昔に求めるか、未来に希望を託すかという問題は、進化論に関係して来る。二十世紀の動乱は、進化論を淵源とすると断言出来る。この学説から「ツアラツストラ」が創作され、全体主義国家誕生に繋がり、強制収容所も生まれた。

(註6)「由が門に入つてから自分は悪口を耳にしなくなった」(「史記」弟子列伝、「孔叢子」論書)、依拠したのは「吾、由を得てより、悪言耳に聞かず」(「史記」仲尼弟子列傳第七)の子路の最期の報告を得ての孔子の述懐である。中島敦は、若き日の子路の言動に対する孔子の感想に転用している。

強烈な発光体に寄り添う形で個人的な不安を解消する。全体主義体制の基本的な人間関係である。ヒトラーも毛沢東もこの種の発光体であり、多くの追随者を内に抱えていた。上位下達の全体主義国家では、国民全体を統制させる事で個人の不安解消に貢献している。二十歳前後の容貌、肉体、学歴に悩む青年を精神的に鍛え上げる為に現在でも有効である。精神不安に戦く学生が、数週間の離島での強化合宿、ヒトラーユングートの現代版で見違えるように生気澆刺、意気揚揚と成って変身した姿を私自身三十年間身近に目撃している。日本共産党の思想訓練であるが、その原型は太宰治を囲む青年達を揶揄した三島由紀夫の発言、「信じあった司祭と信徒」(「私の遍歴時代」)にある。両者共に組織内の人間に恩寵を与え、身近な他者に対して攻撃の姿勢を崩さない事は、共通している。個人的

には、両組織共に揶揄、嘲笑を加えて身の危険を感じた個人的な体験がある。

宗教や政治結社とは無縁な個人の場合は、どうか。一番身近な個人の不安、葛藤の解消は、学閥内部に安住する事か。私を研究職に導いた二人の教授は、第一高等学校、東京帝国大学卒業の経歴であるが、最後まで学歴を披歴した事は無かった。松本清張が追求した政治犯罪は、東大法学部卒業の高級官僚が、下級官吏に汚職の罪を着せて抹殺する話である。しかし、一家の著述の努力で大蔵省の官僚の権限も政治家の手中に掌握されているだろう。「落差」(「文藝春秋」昭和三十八年六月)では、教育界に君臨する東京教育大学の腐敗と反体制教育体制を粉砕した。筑波大学への変遷過程で、一高等学校で暴言、強権を駆使した東京教育大学出身者の権限も大幅に後退した筈である。太宰治「如是我聞」で揶揄された欧州留学経験を有する東京大学教授、具体的には渡辺一夫であるが、その栄光も欧州の凋落と同時に色褪せてしまった。学閥での個の安住も昨今は難しく成ったと言えそうである。躁鬱と不安の時代に突入したと言えそうである。国家機関内部で新興宗教、先鋭化した共産主義が蔓延る所以である。

太宰治「如是我聞」では、支賀直哉の発言「二、三日前に太宰君の『犯人』とかいふのを讀んだけれども、實につまらないと思つたね。始めからわかつてゐるんだから、しまひを讀まなくたつて落ちはわかつてゐるし・・・」を座談会で引き出した二人、中村真一郎、佐々木基一の二人は、おけらと蔑称されている。その定義と行動は、「その人を尊敬し、かばひ、その人の悪口を言ふ者をののしり殴ることによつて、自身の、世の中に於ける地位とかいふものを危ふく保たうと汗を流して懸命になつてゐる一群のものの謂である。」「なほ、その老人に茶坊主の如く阿諛追従して、まつたく左様でゴゼエマス、大衆小説みたいですね、と言つてゐる卑しく瘦せた俗物作家、これは論外。」、小説の神様と尊敬され、戦前の文壇を席捲した志賀直哉とその門下生の密着は、かくの如く太宰治に罵倒された。「藝術に於ては、親分も、子分も、また友人さへ、無いものやうに私には思はれる。」、こうした決意を披露した太宰治自身、生涯取り巻き連中からのお追従に囲まれて生きた。太宰治とその弟子に嫌悪の情を隠さなかった三島由紀夫も晩年は、太宰治同様の取り巻き集団「楯の会」を創設した。「三熊野詣」(「新潮」昭和四十年一月)

で折口信夫とその門下生の密着ぶりを揶揄した三島由紀夫自身、晩年の孤独に耐えられなかったようだ。ちなみに私自身は、国文学の学級の徒でありながら恩師や門下生は無く、共産党の秘密結社とも無縁で生きて来た。しかし、派閥に安住した無能な老人の接待は数限りなく経験してきたが、彼等は例外なく権威を振りかざす横着者であった。

(註7)「南風の詩」「静思して嘯はず、以て骨立つる」(「孔子家語」弁楽解、「説苑」修文)、「昔舜は五絃琴を弾じて南風の詩を作った。南風の薫ずるや以て我が民の愠を解くべし。南風の時なるや以て我が民の財を阜にすべし。」(「弟子」四)、この個所の説明は三好行雄脚注に拠れば、「(舜)中国古代の伝説上の王。五帝のひとり。堯の信頼を得て摂政となり、堯の没後に帝位についた。聖徳の君主の代表として堯と双称される。異母弟の象を愛した父に命を奪われようとするが、終始、孝悌の道を尽して変わらなかったという。(南風の詩)舜の作と伝えられている五言の詩で、孝道を説き、天下の治と国民の富をうたったものという。『孔子家語』に〈南風之薫兮、可以解吾民之愠(怒)兮。南風之時兮、可以阜(豊かにする)吾民之財兮〉とある。」

孔子が、音楽的な才能に恵まれていた事は、「子、斉に在りて韶を聞き、三月肉の味を知らず。曰はく、『罔らざりき、楽を為すことの斯に至らんとは。』」(「論語」述而第七)とある如くである。音楽の素養は、幼時からの教育環境や本人の能力、あるいは時代の趨勢に負う。戦前に於いて音楽的な層は薄かったが、文学的な集中は熱狂的なものがあつた。現在は、文学は衰退し音楽の隆盛は留まる所を知らない。谷崎潤一郎「きのふけふ」(「文藝春秋」昭和十七年)には、戦前日本に留学した豊子愠なる支那人の随筆を紹介している。ここには、独逸留学を志す医学生が、独逸生活に耐える為にヴァイオリンの練習に励む悲惨な姿が記述されている。しかし、孔子自身は百科全書的な才能を一面では忌み嫌っている。「子夏曰はく、『小道と雖も、必ず観るべき者有り。遠きを致せば恐らくは泥まん。是を以て君子は為さざるなり。』」(「子夏のことは、『わずかな芸技のたぐいでも、必ずとりえはあるものだ。ただ深入りすると足が抜けなくなる。だから君子はそういうものを習おうとしないのだ。』」(「論語」子張第十九)、つまり人生の最終的な大きな課題を優先させる為、末梢的な事柄に囚われるな、という教訓である。多芸を戒め、芭蕉の云う「終に無能無才にして此一筋につながる。」(「幻住

庵記)の述懐に重なる言動である。

(註8)「古の道を釋てて由の意を行はん。可ならんか。」(昔の聖賢の教えから離れて由自身の考えで行動したい。よろしいでしょうか。)(「孔子家語」六本、「説苑」建本)「是ある哉。子の迂なるや!」(「史記」孔子世家第十七、「論語」子路)、以上は独立不遜な子路の言動である。最も孔子教徒として不向きな男が、つまり洗脳教育に向いていない素材が徐々に孔子教室の忠実な生徒に成る過程を記述する。「子路が他の所では飽く迄人の下風に立つを潔しとしない獨立不羈の男であり、一諾千金の快男兒であるだけに、碌々たる凡弟子然として孔子の前に待つてゐる姿は、人々に確かに奇異な感じを與へた。」、個性豊かな一個の人物が一人の人物に全面的に傾斜していく実態が、以下支那古典を典拠に余す所なく語られて行く。

「李陵」は、中華教徒として全存在を賭けて生きて来た一人の武人が中華社会から離反していく姿を痛みを持って記述した一篇の叙事詩である。昭和十年代の共産党員の転向の課題を裏面に抱えている。「弟子」の作品的な主題は、「悟淨歎異」「悟淨出世」の問題に重複し、不安に怯える個人が絶対的な存在に帰依する事で個人としての自我を喪失する筋展開である。昭和前期に隆盛を極めた共産党への入党と「四・一六事件」(第三次共産党検査)によって生じた個人の精神の空白を埋める為に復興した絶対主義、具体的には日本浪漫派の運動を社会的な背景に持っている。昭和前期の社会不安から生じた知識人の自意識の問題、その解消の手段として広く流布したシェストフ「不安の哲学」も背後の社会にある。

(註9)「巧言令色足恭、怨ヲ匿シテ其ノ人ヲ友トスルハ、丘之ヲ恥ツ」(「論語」公冶長)「生ヲ求メテ以テ仁ヲ奢スルナク身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スアリ」(「論語」衛靈公)「狂者ハ進デ取り狷者ハ爲サザル所アリ」(「論語」子路)「敬ニシテ禮ニ中ラザルヲ野トイヒ、勇ニシテ禮ニ中ラザルヲ逆トイフ」(「礼記」仲尼燕居)「信ヲ好ンデ學ヲ好マザレバソノ蔽ヤ賊、直ヲ好ンデ學ヲ好マザレバソノ蔽ヤ絞」(「論語」陽貨)、三好行雄脚注に拠れば引用の孔子の言辭は、「弁舌がさわやかで、表情をことさらに和らげ、ひどく腰が低いこと、また、心中に恨みを持ちながら、その人と友人付合いをすることを、自分(丘)は恥ずかしいことだと思ふ」「(志士仁人といわれる人々は)命を惜しんで心の徳を傷付けることをしないし、身を殺して心の徳をまっとうするものであ

る」「狂者、つまり熱情家は積極的に行動し過ぎるし、狷者、つまり強情な人間はあまりにも妥協がなさ過ぎる」「敬いつつしむ心があっても、(することが)礼に適っていないのを粗野(理に達しないこと)といい、することが勇ましくても、礼に適っていないのを逆(道理にさからうこと)という」「信を好んでも学問を好まなければ盲信して自他を傷付ける弊害があり、直きことを好んでも学問を好まなければ、義理や人情を無視して蔽にすぎるといふ弊害がある。」

(註10)「汝の中都を治めし所の法を以て魯國を治むれば則ち如何?」「何ぞ但魯國のみならんや。天下を治むると雖も可ならんか。」「(弟子)六、以下も同じ)に、魯の定公と孔子の問答は「孔子家語」相魯、に拠る。「晉の魏榆の地で石がものを言つたといふ。民の怨嗟の聲が石を假りて發したのであらうと、或る賢者が解した。」「(春秋左氏傳)昭公八年)「孔子の推舉で子路は魯國の内閣書記官長ともいふべき季氏の宰となる。」「現在魯侯よりも勢力を有つ季・叔・孟・三桓の力を削がねばならぬ。三氏の私城にして百雉(厚さ三丈、高さ一丈)を超えるものに郟・費・成の三地がある。先づこれ等を毀つことに孔子は決めその実行に直接當つたのが子路であつた。」「費の城を毀しに掛つた時、それに反抗して公山不狃といふ者が費人を率ゐる魯の都を襲うた。」「(春秋左氏傳)定公十二年)、前者は、三好行雄脚注では「(魏榆の地で石がものを言つた)魏榆は春秋時代の晉の邑(町)。『春秋左氏傳』昭公八年に記事が見える。同年春の出来事で、晋侯が師曠にその理由を尋ねると、師曠は(事を成すに時成らず、怨讒、民に動けば、則ち言うに非ざるの物にして言うこと有り(事をおこなうのが時節に適っていないので、国民の間に、恨みそしりが起こると、ものを言うはずもないものがものを言うことがある)と答えたという。」と解説し、後者は「(郟・費・成)郟は叔孫氏の、費は季孫氏の、成は孟孫氏の居城で、堅固な壁をめぐらし、武器・食料を豊富にたくわえた要害の地であつた。孔子はその城壁を撤去しようとしたのである。」と説明している。

「石、何の故にか言ふ。」對へて曰く、「石は言ふこと能はじ。焉に憑れるものあらん。然らずんば、民の聴くことの濫ならん。抑々臣又之を聞けり、曰く、(事を成すこと時ならず、怨讒、民に動けば、則ち非言の物なれども言ふことあり)と。今、宮室崇侈にして、民力彫盡し、怨讒並び作りて、其性を保つことなし。石の言ふこと亦宜ならずや」と(「春秋左氏傳」昭公八年)、典拠

に拠れば師曠は、晋侯に巷の民の声を上申した訣である。

「是に於て叔孫氏、郟を墮つ。」「二子(公孫不狃、叔孫輒)、齋に奔る。遂に費を墮つ。」「將に成を墮たんとす。」「(春秋左氏傳)定公十二年)、典拠に拠れば孔子の命を受けた子路は、郟、費の居城を破壊するも成の孟孫氏の居城の破壊には至らなかつた訣である。

(註11)「齊との間の屈辱的媾和の爲に、定公が孔子を随へて齊の景公と夾谷の地に會したことがある。その時孔子は齋の無禮を咎めて、景公初め群卿諸大夫を頭ごなしに叱咤した。戰勝國たる魯の齋の君臣一同悉く顔へ上つたとある。」「(弟子)六、以下も同じ、「史記」孔子世家、「孔子家語」)「彼の美婦の口には君子も以て出走すべし。彼的美婦の謁には君子も以て死敗すべし。」「(「史記」孔子世家)、後者は三好行雄脚注に拠れば「美しい女の口舌は毒があり、君子もまた避けて出るべきである。美しい女の頼みは國を滅ぼし、君子も又危うい」であるが、原文とは少し違ふとある。

魯の定公が齋の景公と會した時に、定公の同伴者である孔子が景公の接待である歌舞を中止させた言動は、「吾が両君、好會を為す。夷狄學、何為れぞ此に於てせん。請ふ有司に命ぜん」「匹夫にして諸侯を熒惑する者は、罪當に誅すべし。請ふ有司に命ぜん」(「史記」孔子世家第十七)というものである。

魯の定公が、齋の景公の派遣した美女軍団の虜になり、孔子が魯の都城を去る時の言辭は、典拠では「彼の婦の口、以て出で走る可し。彼の婦の謁、以て死し敗る可し。蓋ぞ優なるかな游なるかな、維に以て歳を卒へざる」「彼の婦人の口舌は、以て人を害するに足る、君子は以て出でて走るし。彼の婦人の謁の情幣は、以て國を亂すに足り、君子は以て死し敗る可し。何ぞ去りて優游と自適して性を養ひ、以て一生を終らざる。」「孔子世家第十七)である。

(註12)「濁世のあらゆる侵害からこの人を守る楯となること。精神的には導かれ守られる代りに、世俗的な煩勞汚辱を一切己が身に引受けること。」「(弟子)七)、には母性喪失の中島敦の絶対者希求の姿勢が見られる。「弟子)では孔子に帰依する子路を描き、「悟淨出世」は三藏法師に帰依する悟淨の物語であり、「李陵」は皇帝武帝を仰ぎ見る三人の男、李陵と蘇武そして司馬遷の相互の一生を描く。同一立場の芥川龍之介は、基督に救済の道を模索したが、中島敦に宗教希求の姿勢が見られないのは、時代の相違か。

「天とは何だと考へる。天は何を見てゐるのだ。その様な運命を作り上げるのが天なら、自分は天に反抗しないではゐられない。」これは孔子の運命を概観し、嘆息する子路の感慨に仮託された中島敦個人の感想である。言うまでもなく、古代支那の聖人を囲む環境を眺望しての日本人である中島敦の感慨である。この嘆息と同じ感慨を日本に留学し、半生を日本に生きた台湾出身の評論家黄文雄（「捏造だらけの中国史」）も漏らしている。一連の著作で記述されているのは、有史以来変わる事無き支那人の詐欺体質である。「すべてが嘘、嘘でないのは詐欺師だけ」これが支那人の本質であり、禅僧夢窓国師「長生きしようと思ったら嘘をついてはいけない」の教訓が下地に成っているのが日本である。背景には、「花咲爺さん」や「日本靈異記」「今昔物語」の教訓的な文芸がある、と言う。

「鳳鳥至らず。河、圖を出さず。已んぬるかな。」は、三好行雄脚注では「『論語』子罕篇第九に見える言葉。（鳳鳥（鳳凰）は飛んでこないし、黄河からは図（河図）もでない。もはやわたしも道を行うすべもなく、これまでである）の意。鳳凰は想像上の霊鳥。河図は伏羲の時代に黄河から出たという、竜馬の背に現れた図。伏羲がこれによって易の卦を作ったという。いずれも聖王の出現を告げる瑞兆とされているもので、孔子は伝説に託して、明敏な君主のいない乱世を嘆いているのである。」とある。

「鳳鳥至らず河。圖を出さず。已んぬるかな。」（「鳳凰の飛んで来なくなった。黄河からは図を負った竜馬も出なくなった。私ももうおしまいだ。」）、山田勝美語釈に拠れば「鳳鳥」（「鳳凰。麒麟・亀・竜とともに四霊と称せられ、それらが現れるのは聖天子の現れるめでたい前兆だとされていた。舜の時には鳳凰が舞い降り、周の文王の時には鳳凰が岐山で鳴き、伏羲の時には、竜馬が図（易の八卦の元となる図）を負うて黄河から出てきたという伝説があった）

「濁世のあらゆる侵害からこの人を守る楯となること。」「世俗的な煩勞汚辱を一切己が身に引受けること。」（「弟子」七）、中島敦の絶対者希求の精神の有りようを奈辺に求めるか、時代風潮のシェストフ「不安の哲学」から演繹して絶対者を求める時代の帰結が、彼個人の精神生活史に影を落としたと考えるのが妥当である。時代的には、軍国主義国家日本、独逸さらにはソ連の絶対者を戴く社会を念頭に置いている。自由社会では宗教集団、さらには地下に潜行した日本共産党の秘密

結社の負の側面を払拭して、古代支那を舞台の理想的な人間関係を構築したと言える。

（註13）「てきばきした實務家の冉有。温厚の長者閔子騫。穿鑿好きな故實家の子夏。些か詭辯派的な享受家宰予。氣骨稜々たる慷慨家の公良孺。身長九尺六寸といはれる長人孔子の半分位しかない短矮な愚直者子羔。（中略）子路より二十二歳も年下であつたが、子貢といふ青年は誠に際立つた才人である。孔子が何時も口を極めて賞める顔回よりも、寧ろ子貢の方を子路は推し度い氣持であつた。」（「弟子」八）、孔子門下の弟子列伝である。卒業論文で谷崎潤一郎作品を通読していた中島敦は、「麒麟」の一文から連想してこの箇所を書いた。（「元氣の好い子路紫の貂の裘を翻して、一行の先頭に進んだ。考深い眼つきをした顔淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いて其の後に續いた。正直者の師者の樊遲」）

「ここに美玉あり。匪に韞めて藏さんか。善賈を求めて沽らんか。」之を沽らん哉。之を沽らん哉。我は賈を待つものなり。」（「論語」子罕篇第九）は、三好行雄脚注では「子貢が、奇麗な宝石があったとして、匪（箱）に入れてしまっておくべきか、善賈（いい買い手）を見付けて売るべきかを問うたのに対して、孔子はもちろん売る、しかし、自分は店で買い手を待っていて売るともりだと答えた。宝石は孔子の暗喩。孔子は仕官の希望を持っているが、自分から売りこみに行くことはしないと答えたのである。」「褐（粗衣）を被て玉を懐く」に就いては「褐は貧しい者が着る粗い毛織物。外面を飾らないで、内に美しい心をもつことの比喩。出典は『老子』七十章。」とある。

孔子弟子列伝の内部での師をめぐる人物像を、最年長の弟子である子路から鳥瞰した図式である。絶対者を囲む、取り巻きの人物内部の互いの能力の査定であるが、こうした記述に第一高等学校、東京帝国大学という男達の間で練磨を生きた作者の過去の履歴が、垣間見られる。太宰治「如是我聞」は、志賀直哉のサロンを罵倒したが、自身の門下生との語らいは後年三島由紀夫「私の遍歴時代」（「東京新聞」昭和三十八年）により司祭と信徒の集まりに揶揄されている。最晩年の三島由紀夫も太宰治の疑似家族を模倣して「楯の会」を作ったが、この種の師弟関係の疑似家族は学会でも折口信夫の学問世界を最後に消滅したようだ。

中島敦が、孔子門下生の男だけの精神練磨の人間関係に興味と同調を見せたのは、自身の第一高等学校、

東京帝国大学の履歴の反映がある。夏目漱石、芥川龍之介、堀辰雄、太宰治、三島由紀夫等によって繰り広げられた文学世界の精進の場は、現在は雲散霧消となつてしまった。男世界で肉体と精神を錬磨した教授達の指導を受けた最後の一人が、私かも知れない。阿川弘之「論語知らずの論語よみ」には、「史記」(「仲尼弟子列傳」)に七十七人の弟子を数えながら女弟子が、一人も居ない事を訝っている。吉田松陰は、肉体的な精神錬磨の氣力を喪失しない為に異性と接触を避けたが、理由はそれではないか。

(註14)「後世畏るべしといふ感じを子路はこの青年に対して抱いてゐる。」(「弟子」八)、「後生畏るべし」(「論語」子罕)の孔子の言辞を子路が同型の若者子貢に対して持った畏怖の感情に転用した。孔子と弟子の宰予とは弁舌で甲乙つけ難い程に巧みである。宰予の弁は、軽薄で取り立てて異議を申し立てる程も無いが、しかし師の孔子の弁の巧みな事にも一片の虚偽がありはしないか、と弟子の子貢が疑問を抱く場面である。師を批判する子貢の心中には、孔子の愛弟子顔淵に対する嫉妬があると子路は、憶測している。こうした子貢に対して年長者である子路が、敬服し親近感を持つ場面である。師匠を取り囲む複数の弟子間のこの種の心理的な駆け引きは、作者の過去の履歴のいかなる反映であろうか。生活の為に大学院を中退した中島敦は、大学での職を希求し、東京帝国大学の教授達に媚諂つた経験は無いはずである。この種の複雑な陰影を持った人間関係は、現在では新興宗教の教祖と弟子達の間に存在し、日本共産党の序列の内部に残存し、なかなしく大学人の師弟間に顕著に存在するらしい。

(註15)「死者は知ることありや？ 將た知ることなきや？」「死者知るありと言はんとすれば、將に孝子順孫、生を妨げて以て死を送らんとすることを恐る。死者知るなしと言はんとすれば、將に不孝の子其の親を捨てて葬らざらんとすることを恐る。」(「弟子」八、以下同じ「孔子家語」)での孔子と子貢との問答を受けて、子路に対する有名な孔子の言が成された。「未だ生を知らず。いづくぞ死を知らん。」(「論語」先進)、この発言から孔子の教えである儒教が宗教ではなく、社会を生きる為の実践倫理である事が判る。死後の靈魂の問題を回避した孔子の解答は、儒教が宗教ではないと言う事を明瞭にしている。孔子の教えは徹頭徹尾、社会を生きる為の実践道徳である。子貢の質問は、肉体が減んだ後の靈魂の所在である。これに対する解答は、現在でも

不明であるが、孔子の解答は二つ共に質問の切っ先を巧みに回避したそれである。解決不可能な問題から視線を避ける事を賢明な弟子に勧めている訣である。

孔子の教えは実践倫理であり、神秘主義のオカルト的な傾向を持たなかった。同趣旨の発言を別の所でも繰り返して言っている。「子は怪・力・乱・神を語らず。」(「論語」述而第七)「未だ人に事ふる能はず。焉んぞ能く鬼に事へん。」(「論語」先進第十一)、日本には低抗無く入り込んだ所以である。奇跡と復活のオカルト現象で民族的な反発を受けた基督教徒との顕著な違いである。イエスの福音を伝道する弟子達が、各地で反発を受けたのと好対照である。「天下を顛覆したる彼の者ども」(「使徒行傳」第十七章六)「人々、死人の復活をききて、或者は嘲笑ひしが」(「使徒行傳」第十七章三十二)「然るに或者ども頑固になりて従はず、會衆の前に神の道を譏りたれば」(「使徒行傳」第十九章九)「また魔術を行ひし多くの者ども、その書物を持ちきたり、衆人の前にて焚きたるが」(「使徒行傳」第十九章十九)、テサロニケでもアテネでもイエスの使徒は、猛反発を受けている。

(註16)「弟子」(九)全体が、谷崎潤一郎「麒麟」の要約である。「孔子は一行の弟子と共に、南子の宮殿に伺候して北面稽首した。南に面する錦繡の帷の奥には、僅に夫人の緇履がほの見た。夫人が頂を下げて一行の禮に答ふる時、頸飾の步搖と腕環の瓔珞の珠の、相搏つ響が聞えた。」(「麒麟」)、「南子は絳維(薄い葛布の垂れぎぬ)の後に在つて孔子を引見する。孔子の北面稽首の禮に對し、南子が再拜して應へると、夫人の身に着けた環佩が遽然として鳴つた」(「弟子」九)、両者の依拠したのは「史記」(「孔子世家」)の以下の一文である。「夫人、黼帷の中に在り。孔子門に入りて北面して稽首す。夫人帷中より再拜す。環佩の玉声、遽然たり。」

中島敦の「麒麟」精読の痕跡は、卒業論文「耽美派の研究」での以下の短評のみである。「この妖婦は『麒麟』の中では、衛の靈公の寵妃南子である。彼女は、その美を以て、聖人たる孔子の徳と争つて、靈公を孔子から奪ふ。炮烙に顔を焼かれたり、頸に長枷を嵌めて耳を貫かれたりする罪人の苦しむ様を喜び眺める南子の妖しい美しさに對しては、孔子と雖も、之を如何ともすることが出来ない。彼をして『我未だ徳を好むこと色を好むが如くなる者を見ざる也』の嘆を發して流浪の途に上らせるのである。」、しかし十年を隔して「麒麟」通読の理解から「弟子」(九)の項目が記述された事

が、窺える。

(註17)「衛に居ること月余、盃公、夫人と車を同じうし、宦者雍渠參乗し出でて、孔子をして次乗と為らしめ、市を招搖してこれを過ぐ。孔子曰く、吾れ未だ徳を好むこと色を好むが如きものを見ざるなりと。ここに於いて之を醜とし、衛を去り曹に過る。」(「史記」孔子世家)、これが典拠として「麒麟」終結場面に使われ「弟子」(九)もこれを再構成した。孔子と南子との会見を弟子の子路が心配し、その進退を危惧した折の「論語」(「雍也第六」)での聖人の発言は、「予所し否ならば、天之を厭たん。天之を厭たん。」(「私が、もしまちがっていたら、天が私を見捨てるであろう。天が私を見捨てるであろう。)」という言辞である。今私は、山田勝美「ポケット論語」(「角川文庫」昭和六十年三月)で孔子発言を引用しているが、直前に同じ聖人の発言「文に勝てば則ち野なり。文、質に勝てば則ち史なり。文質彬彬として、然る後に君子なり。」(「人格はすぐれていても、学識が劣っていても、野人でしかない。学識がすぐれていても、人格が劣っていても、事務屋でしかない。人格と学識が並び備わってはじめて君子といえる。))を見出して感慨を覚えた。人民中国成立後再び軍服に身を包み天安門樓上に立った共産党主席に所属の校長を惨殺した女学生は、毛沢東の腕に紅衛兵の腕章をつける榮譽を担った。公表された二人の会話は、以下の如くである。「名前は何と言うのか?」「宋彬彬です」「文質彬彬の彬かね?」「そうです」「要武嘛!」「勇ましくなりなさい」という物である。「われわれのこの党を罰する」為に共産党主席が取ったのが、無知文盲の少年少女を使う事である。松本清張は、毛沢東にはこの種の天才的な発想があると絶賛した。毛沢東の独創による教室を戦場と化す、共産党の思想教育は、日本では模倣の域を出なかった。しかし、揺れ動く若者の精神を理論と実践で鉄の如く強固にする手法は、教育界に於いて積極的に取り入れるべきである。精神衰弱の若者が、この世を生き難いと苦痛に喘ぐ醜い女が、連日の共産党の思想訓練で不死鳥の如くに蘇る姿を私自身二十年間目撃してきている。肉体、容貌、学歴で劣り、あるいはこれら全てを兼ね備えていながらしかるべき社会的地位を得られない者を救出すべき人生の秘鑰である。文化大革命で七千万人を超える中国人を死に追いやった毛沢東の掲げた無数の標語は、彼の膨大な支那古典の涉獵の過程から生まれて来た。毛沢東政権下の三十年は、書齋で思索し思考する者を共産党主

席ただ一人にする為の淘汰の作業であった。日本共産党の黨員であった松本清張が、作品で告発したのは高級官僚とそれに密着した自民党政治家の横暴である。一文学教師である私が、私的に経験したのは日本社会の底辺で喘ぐ者からの二十数年に及ぶ人民裁判の洗礼であり、実際に目撃して来たのは、特権的な学歴を有する者の然るべき地位を得る事の出来なかった呻き声、叫び声、怒号と罵声である。「述べて作らず」(「論語」述而第七)とあるように孔子は周代の、民族の根幹を収斂した。基督に就いても「彼は實に古い炎に新しい薪を加へるジャアナリストだつた。」(「西方の人」十九)という芥川龍之介の指摘がある。共産党主席は、漢民族を変質させる為に数千万の犠牲者を出して失敗した訣である。戦前の皇民化教育の過程で、台湾、朝鮮、満州には無数の神社があったが、一夜で消滅したのは日本帝国が共産党主席のように民族の変質を企てた為である。

現在の日本の組織内の問題に還元すれば、命令と服従の問題である。百人の組織内で二人が、強固な共同を組んだ場合、戦いは常に二対一の戦場に成る。この種の危機感から三島由紀夫「楯の会」が、誕生した。示唆を与えたのは、敗戦時直属上官を撃ち殺して、自決した国文学者蓮田善明の行為である。

(註18)「頭は窟に窺ひ尾は堂に施く」(「窺頭於窟拖尾於堂」莊子)。「大きな竜の形容。『葉公好竜』という話として有名。」(「葉公」は、春秋時代の楚の沈諸梁のこと。楚の葉という地に領地をもっていたのでいう。「葉公好竜」は、物事をこのむのに、このみかたが軽薄で、真からこのむのではないたとえ。葉公は龍がすきで、家のいたる所に龍をえがかせたほどであったが、ほんとうの龍が現われたら、おそれて逃げた故事。「角川新辞典」)、以上の中国故事名言を踏まえた中島敦の解説は、「葉公子高は龍を好むこと甚だしい。居室にも龍を雕り縋張にも龍を畫き、日常竜の中に起臥してゐた。これを聞いたほん物の天龍が大きに欣んで一日葉公の家に降り己の愛好者を覗き見た。頭は窟に窺ひ尾は堂に施くといふ素晴らしい大きさである。葉公は之を見や怖れわなないて逃げ走つた。其の魂魄を失ひ五色主無し、といふ意氣地無さであつた。」(「弟子」十)

ここで「葉公好竜」の挿話を提供し、高い理想を掲げて諸国を移動する孔子一行が現情にそぐわない理由で迫害に遭遇する状況の記述である。孔子を迎える諸侯が、誰もが「葉公子高」の類で高い道德に魅力を感じ

ながら誰一人積極的に受け入れる状況にないという事である。「匡では暴民の凌辱を受けようとし、宋では姦臣の迫害に遭ひ、蒲では又兇漢の襲撃を受ける。」「一行が招かれて楚の昭王の許へ行かうとした時、陳・蔡の大夫共が相計り秘かに暴徒を集めて孔子等を途に圍ましめた。」(陳蔡の厄)

「葉公好龍」の挿話を引いて中島敦は、春秋戦国の世にそぐわない孔子の理想を際立たせている。黄文雄の著作に拠れば、この種の理想が以後今日迄支那で遠せられた事はない。支那との接触は、二千年來隔靴搔痒のもどかしさを伴った交流が続いて来た。近年日本との摩擦が激化したのは、初めて日本人は庶民レベルで現実の支那に直面したからである。現実の支那の惨状を知る事なく聖人の言行録「論語」の世界を盲信した日本人は、明渡航を企てた藤原惺窩以来後を絶たない。近年では、毛沢東の大躍進の失敗で支那大陸が飢餓地獄に陥った時に日本では、「中国、小麦生産高で米国を抜く」という標語が新聞の社会面に躍っていた。北朝鮮の現実掌握が十分でなくて、饑凍の地に渡った在日朝鮮人の悲劇は近年の事である。虜囚の日本軍人慰問の為に収容所列島に降りた社会党の女代議士は、労働者の天賦に來た感激で大地に接吻した。この種の人間の行動を竹山道雄は、「人は世界を幻のように見る」等の一連の論文で記述した。知識の蓄積が感性を曇らせる事をニーチェ「ツアラトウストラ」で言及し、中島敦「過去帳」二篇で語り、「古譚」四篇で記述している。私見でも、膨大な論文目録を残した直属上司は、人間評価に於いて学問に無縁な同僚の裁量に遥かに及ばなかった。学問蓄積が、現状認識を希薄にさせる、ニーチェのそして中島敦の課題であった。

(註19)「由よ。我汝に告げん。君子樂を好むは驕るなきが爲なり。小人樂を好むは懼るなきが爲なり。それ誰の子ぞや。我を知らずして我に従ふ者は。」(「弟子」十)は、典拠「孔子家語」「說苑」。「窮するとは道に窮するの謂に非ずや。今、丘、仁義の道を抱き亂世の患に遭ふ。何ぞ窮すとなさんや。もしそれ、食足らず體瘠るるを以て窮すとなさば、君子も固より窮す。但、小人は窮すればここに蓋る。」(「論語」衛靈公)、三好行雄脚注に拠れば、「由よ。お前にいうことがある。君子が樂をたのしむのは驕りたかぶる心をなくすためである。つまらない人間が樂をたのしむのは恐れる心をまぎらわすためである。このわたしの真意を知らないで、自分につき従っているのは、いったい誰ですか」「真に困窮す

るとは、仁義道德の道にゆきづまることではないのか。いま、わたしは仁義の道をこころに抱いて乱世の災難にあっているのだから、どうして困窮しているといえようか。もし、食料が乏しく身体がやつれはてるのを困窮するというのであれば、むろん、君子も又困窮する。しかし、小人が困窮したら、とりみだして目茶目茶になってしまう。(そうならないのが、君子の小人とちがうところだ)」共に引用は、原文通りではないと但し書きがある。孔子が、危機に陥った時に言った同種の発言が残っている。「文王既に没し、文、茲に在らずや、天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後死者、斯の文に與るを得ざらん。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人其れ予を如何せん」「天徳を予に生ず、桓魋其れ予を如何せん」(「史記」孔子世家第十七)、自分が滅んでしまえば、周時代の理想的な生活形態そのものが失われる。天が、漢民族固有のあるべき思想を守る意思がある限り、私の運命は人知の困難に左右されることは無い。この種の一つ捨て身の自身が、最終的に孔子を孔子たらしめ「論語」を漢民族の遺産にし得たと言える。ここでも私は、ささやかな個人的な交流から単身勇猛果敢に行動する米国人と中国人、そして個人としては極めて卑小な日本人を考えないではいられない。半世紀を大学の貴公子、学会のプリンスと称された大学人と個人的に接した感想、辺境の地での一個の日本人の人品の卑しさに就いてである。芥川龍之介「ひよつとこ」(「帝国文学」大正四年四月)の主題に連なる課題、徳川三百年の密度の高い密告社会を生きねばならなかった日本民族の負の遺産に就いてである。現実には私が、相手にしたのは学童疎開の生き残り、あるいは丸山真男の言う「永久革命の民主主義者」達である。いわゆる「雪隠で飯頭」を食って成人した人達である。この人達の就職に際しての推薦文の素晴らしさ、あるいは自分がいかに老教授の寵愛を受けたかという回想譚は、半生を賭けた「ひよつとこ」の演技が半端でなかったかを物語っている。輸送の貧弱な日本軍は、残留の米、味噌類を後から来る友軍に供しない為に焼き捨てたと言う、岡本太郎の一文を読んだ記憶が蘇る。劣悪な民族を懲罰する為に米軍に拠る懲らしめが必要だ、という岡本太郎、永井荷風の暴言は現実になってしまった歴史がある。日本民族の劣悪な側面を助長したような教育界に身を置き、政府援助の極致を思わせる沖縄在住の私の視点から現状を鑑みれば、ワイマール共和国の末期を思わせる。私見では、日本社会の倫理感の

後退は、祖国防衛に散った英霊の無駄死にあり、その根幹は日露戦争の検証を怠った事から派生した。

(註20) 谷崎潤一郎「麒麟」に孔子と隠者林類との隠遁生活に就いての問答がある。「列子」天瑞に拠る挿話を中島敦は、ここで踏襲している。隠遁生活の老人と子路の問答は、「長沮・桀溺」「楚の接輿という佯狂の男」等の挿話と同じく「論語(微子篇第十八)」に拠り、前記の三人の隠者の話が記載されている。楚の接輿は、「鳳や鳳や、何ぞ徳の衰へたる。往く者は讓むべからず。来る者は猶追ふべし。已みなん已みなん。今の政に従ふ者は殆し。」と言いながら孔子の傍を過ぎる。長沮桀溺の二人が、子路に語る発言は以下の如くである。「滔滔たる者天下皆是れなり。而して誰と以にか之を易へん。且つ而其人を辟くるの士に従はんよりは、豈世を辟くるの士に従ふに若かんや。」以上二人の隠者との遭遇の後で「弟子」(十一)の依拠した人物との邂逅がある。「弟子」(十一)で「詩経」(小雅湛露の詩句)を挿入しての段落構成は、孔子「龜山操」の詩句を入れて隠者林類との会話を展開した谷崎潤一郎「麒麟」の作品構築を真似た物だ。「麒麟」での孔子と隠者の語り個所は、大島真木脚注に拠れば「列子」(天瑞)の言い換えである。「林類、年且に百歳ならんとす。春に底りて裘を被、遺穂を故畦に拾ふ。並びに歌ひ並びに進む。孔子衛に適く、之を野に望み、顧みて弟子に謂つて曰はく。彼の叟は與に言ふべき者なり、試に往いて之を訊へど。子貢諒うて行き、これを隴端に逆へ、之に面ひて歎じて曰はく、先生曾て悔いざるか、而かも行歌して穂を拾ふと。林類行いて留らず。歌うて輟まず。子貢之を叩いて已まず。乃ち仰いで應へて曰はく、吾れ何をか悔いんと。子貢曰はく、先生、少うして行を勤めず、長じて時に競はず、老いて妻子無く、死期將に至らんとす。亦何の樂あつて、穂を拾うて行歌するやと。林類笑つて曰く、吾の樂しみと為す所以は、人皆之れあれども、反つて以て憂と為すなり。少うして行を勤めず、長じて時に競はず、故に能く壽きこと此の如し。老いて妻子なく、死期將に至らんとす、故に樂むこと此の如しと。子貢曰はく、壽は人の情なり、死は人の惡なり、子死を以て樂みと為すは何ぞやと。林類曰く、死と生と一往一反す、故に是に死するもの、安んぞ彼に生ぜざること知らん、故に吾れ安んぞ其の相若かざること知らん。吾又安くんぞ榮榮として生を求むるの感に非ざるを知らん、亦又安くんぞ吾が今の死の昔の生に愈らざるを知らんと。子貢之を聞いて其意を論らず、還つ

て以て夫子に告ぐ。夫子曰く、吾れ其の與に言ふべきを知れり、果して然り。然れども彼は之を得て、而かも盡さざるものなりと。」(「列子」天瑞)、また中島敦愛読の書であるアナートル・フランス「舞姫タイス」にも同様の挿話がある。出奔する意中の人である「タイス」を追跡する僧パフニュスは、ナイル河畔で救世主である基督の存在を知らずに生きる裸形の人物に遭遇する。二人の間で交わされる問答は、さながら「列子」(天瑞)の人生問答との類似を見せている。「論語」(微子篇第十八)では、「接輿」「長沮・桀溺」(「弟子」十一)の順に登場してきている。中島敦は「弟子」(十一)では、隠者登場順序を作中で逆にさせている。

(註21)「論語」公治長の孔子の言辞を子貢と宰予の二人が、解釈の相違で対立する。それを鳥瞰する実践家の憤怒により作者の「論語」理解を提示して見せた場面である。「十室の邑、必ず忠信丘が如き者あり。丘の學を好むに如かざるなり。」(三好行雄脚注「家が十軒程しかない小さな村でも、かならず、誠実で言葉を違えないことでは自分に匹敵する人物はいるだろう。ただ、自分ほどの学問好きではないだろうが……」の意)この発言の主旨は、孔子が人格や学問を努力に依って獲得した事を述懐した発言である。宰予(三好行雄脚注「礼に通じ、能弁家として知られている。孔門ではやや異端の思想家で、のちの墨子以後の実用主義の先駆者と見做される。」)は、孔子の発言を率直に受け入れている。これに対して子貢(三好行雄脚注「文学・弁舌にすぐれ、財政経済に明るく、政治的才能にもめぐまれていた。」)は、孔子の人格的な学問的な完成は、先天的な素質に与っていると云う。この孔子門下生の人物配置による議論は、中島敦の創作である。二人の年少の弟子、弁舌と屁理屈に抜きん出る若者を眼前にして子路は、感情の些細な齟齬が全部を御破算にしてしまうという孔子の発言を想起している。「巧言は徳を亂る。小を忍ばざれば、則ち大謀を亂る。」(山田勝美「(ほんのちよつとした)あまいことばが、人を墮落させる。さ細なことをがまんできなければ、遠大な計画をぶちこわすこともある。」)

(註22)「由の若きは、其の死を得ざらん。」(「子路のような気性では、おだやかな死にはできないかもしれないぞ。」「論語」先進)と孔子に言わせた子路の人物像を諸文献から造型した場面である。社会を健全に生きて天寿を全うする生き方を是とする孔子の実践倫理は、一面で明哲保身の側面を持つ。「滑濁あわせ呑む」の処

世の生き方を備えている。臨機応変に身を処して、社会的な上流を目指して賢く生きる側面があり、社会的状況に関らず猪突猛進の子路の人生観に馴染めない面を持つ。二人の間に横たわる溝を自覚して孔子が、愀然として発言する。「邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。あの男も衛の史魚の類だな。恐らく、尋常な死に方はしないであらうと。」(「弟子」十二、三好行雄脚注「史魚」(衛の大夫。史鱗とも書く。世襲の歴史官だったが、主君の靈公が人材を用いないので、死んで諫めた。「直なるかな史魚、邦道あるときも矢の如し、邦道なきときも矢の如し」論語、衛靈公第十五)とある。

楚が呉を討った時の工尹商陽の行動を孔子が、「人を殺す中、又禮ありと。」と賛じた故事は、『禮記』檀弓下(三好行雄脚注)に依拠している。「工尹商陽、陳弃疾と、呉師を追うて之に及ぶ。陳弃疾、工尹商陽に謂ひて曰く、王事なり、子弓を手りて可なりと。弓を手る。子諾を射よと。之を射て一人を斃し、弓を輟にす。又及ぶ。之に謂ふ。又二人を斃す。一人を斃す毎に其の目を擗ひ、其の御を止めて曰く、朝には座せず、燕には與らず。三人を殺すも亦以て反命する足らんと。孔子曰く、人を殺すの中に、又禮ありと。」(「國譯漢文大成」禮記)、形骸化した礼に対する子路の不満で、醜い女が美人コンテストの審査員を務めて美しい女を選考から外すが如き慣習である。(私は審査をする立場にあって、審査される立場にはない。)私的な経験では、研究能力の無い者が三十年間業績審査をするが如きである。吉行淳之介「スーパー・スター」は、自分の文学を審査する三島由紀夫を揶揄したものだ。

「人臣の節、君の大事に當りては、唯力の及ぶ所を盡し、死して而して後に已む。夫子何ぞ彼を善しとする?」「死して而して後に已む」(「論語」秦伯篇第八)、この子路の発言の依拠する所の意味は、三好行雄脚注に拠れば「仁の完成は死んでから始めて終るのだ、の意。転じて、死ぬまで努力を続けることの意に用いる。」、この場面は孔子が自己の明哲保身の態度を譲歩させて幾分、子路に譲った場面である。

孔子と子路の人物対比を日本社会に求めれば、井伊大老と襲撃した水戸藩士に原型が見られ、拡大すれば老体の徳川幕府と打倒した勤皇の志士である。後者が権力を獲得し、劣悪な分子が淘汰されて残された志士が近代国家建設に成功した事がその後、安易な模倣者を生んだ。戦前の青年将校や戦後の学生運動は、体制

破壊を目論む若者に対する社会の甘えの構造から派生したと言えそうだ。

(註23)「文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得与於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何」(「今、周の文王は既に死んでこの世に居られない。文王が既に亡くなられた後は、文化の伝統は絶える事無く、この私の身の上にごそあるのではないか。天がもしこの伝統を滅亡させてしまうつもりであれば、文王より後の時代の間人であるこの私は、この文化の伝統に参与出来ぬ筈である。天がまだこの文化の伝統を滅ぼそうとしないかぎりには匡の人々如き者がこの私をどうする事が出来ようか。どうする事も出来るものではないのだ。)(「論語」子罕)、「万鐘則不弁礼儀而受之。万鐘於我何加焉」(「所が万鐘もの大禄になると、礼義に適うか否かを顧みずに飛び付く。しかし万鐘もの大禄、まさか一人で食べられもせず、自分に取って何の足しになるのだ。)(「孟子」告子篇上)、何れも孔子の自信を示した言辞である。

「如何なる場合にも絶望せず、決して現実を輕蔑せず、與へられた範囲で常に最善を盡すといふ師の智慧の大きさも判るし、常に後世の人に見られてゐることを、意識してゐるやうな孔子の舉措の意味も今にして初めて頷けるのである。」、長い年月を閲して子路は孔子の実践的な教え、儒教その物の意味を体感したという事である。背後には、無言実行でその範を示した孔子のその人の存在がある。明敏で理屈で思考する子貢には、子路の到達した境地を窺い知り得ない、これは史的事実ではなくて中島敦の「論語」熟読から来る私的な感慨である。「弟子」で描かれた孔子と子路の師弟関係こそが、教育の理想の極限であり達成の最高地点である。しかし、孔子の時代に孔子の理想は一度も、その片鱗も達成されなかった。「道行はれず。桴に乗りて海に浮かばん。我に従はん者は、其れ由なるか。」(「論語」公冶長第五編)と嘆いた所以である。黄文雄の一連の著作に拠れば、二千年間支那で孔子の思考した理想が、社会的に達せられた事はなく、その幾分かの達成は日本で為された。漢籍の理想と現実の支那を見誤ったのは荻生徂徠一人ではない。二千年の支那の停滞と混乱、無秩序の根底に孔子の実践道徳があると考えたのが、毛沢東である。共産党主席が、粉碎した象徴的な会話、葉公と孔子のそれが「吾が党に直射なる者有り。其の父羊を攘みて、子之を証せり。」「吾が党の直なる者は、是に異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠

す。直、其の中^{うち}に在り。」(「論語」子路篇第十三)後者の孔子の立場で民衆を教化した事で支那の後退が為されたことと共産党主席は、考えた訣である。この成果は、毛沢東暗殺を計画した後継者林彪の行動をその娘が、逐一公安当局に報告する形で顕れた。孔子の子路への無言の教化を短期間、強固に徹底的に展開したのが、共産党の思想訓練である。カトリック教会で実用化され、ナチスの武装親衛隊で実用化され、民間人の大量殺人の汚点を歴史に刻んだ思想訓練は、現在の日本では共産党と新興宗教に残存している。個人的には、自意識を破壊する事で個人の容貌、肉体、学歴の負の側面を払拭する事で有効な社会的なメスと成っている。

戦時下、中島敦が「弟子」でこうした理想的な人間教化の課題を扱ったのは日独の絶対体制の隆盛の中で流行ったシエストフ「不安の哲学」から、この種の課題に興味を持ったからだと思われる。我とは何か、という思想遍歴の過程で最終的に個人の煩悶解決の道を中島敦は、見出していた。「ある時はファウスト博士が教へける『行為によらで汝は救はれじ』(「和歌でない歌」)とあるように組織内に入り込み、個の存在を抹消することである。

(註24)「牛人」「盈虚」(「古俗」二篇)を「春秋左氏伝」を典拠にして書き上げた調査と「麒麟」の学習から以下の事績が、記載された。「先づ公叔戊といふ者が南子排斥を企て却つてその讒に遭つて魯に亡命する。續いて靈公の子・太子蒯聵も義母南子を刺さうとして失敗し晉に奔る。太子缺位の中に靈公が卒する。やむを得ず亡命太子の子の幼い輒を立てて後を嗣がせる。出公がこれである。出奔した前太子蒯聵は晉の力を借りて衛の西部に潛入し虎視眈々と衛侯の位を窺ふ。これを拒まうとする現衛侯出公は子。位を奪はうと狙ふ者は父。」(「弟子」十四)

運命の地、衛に赴任させるにあつての孔子の激励の言葉は、三好行雄脚注に拠れば「恭にして敬あらば以て勇を懾れしむべく、寛にして正しからば以て強を懐くべく、温にして断ならば以て姦を抑ふべし」(「うやうやしくして敬のころろがあれば、勇ある者を従わせることができる。寛大で(処置が)正しければ、民衆をなつかせることができる。おだやかでいて事にあつて決断ができれば、よこしまな人間をおさえつけることができる」)、この依拠した孔子の子路に向けた助言の原文は、「蒲には壯士多く、又治め難し。然れども吾、汝に語らん、恭以て敬、以て勇を執る可し、寛以て正、

以て衆を比づく可し、恭正以て静、以て上に報ず可し」(「史記」仲尼弟子列傳)、任地で子路の脳裏にあった師の言は「教へずして刑することの不可」(「理非を教えることなく刑罰をあたえる。」)であり、蒲の地での師の推薦の言辭は、「論語」(顔淵篇第十二)「片言以て獄を折むべきものは、それ由か」(「ただ一言でびたりと判決が下せるのは、由だけであろうな。」)

「續いて靈公の子・太子蒯聵も義母南子を刺さうとして失敗し晉に奔る。」(「弟子」十四)、「春秋左氏傳」(定公十四年)に依拠したこの場面は「盈虚」では、以下の如く記す。太子蒯聵の示唆で南子夫人暗殺を頼まれた戲陽速は、躊躇つて行動に出なかった。互いに衛から国外、宋から晉に逃れた二人は罵り合った。暗殺の行為に及ばなかった戲陽速を非難する蒯聵に対して、言い訳は「太子は私を脅して、自分の義母を殺させようとした。承知しなければ屹度私が殺されたに違ひないし、もし夫人を巧く殺せたら、今度は必ず其の罪をなすりつけられるに決つてゐる。」(「盈虚」というものである。二千年以前、春秋戦国時代の要人暗殺の細部が、今日の中国で再現されている事に驚く。毛沢東の後継者である林彪は、権力基盤を失い肅清の恐怖から共産党主席暗殺計画を実行し、未遂に終わりソ連に脱出する。国外脱出の計画を察知した林彪の警備秘書は、一家の逃亡を阻止する為に林彪の息子林立果から撃たれて負傷する。自分の責任を回避する為に自分で撃つて負傷したという説の可能性がある。高文謙「周恩来秘録」(「文藝春秋」平成十九年三月)に拠れば、癌の末期患者になった周恩来は、死の床で毛沢東賛歌の一節を高唱し、肅清の矛先を回避して見せた。文字通り「三国志演義」の世界の再現である。狂気を装って中大兄の皇子の追求をかわした有間皇子の例もあるが、この種の韜晦の術が現存しているのは、日本では大学、取り分け私立大学では顕著に見られるらしい。半生を尽くした側近に裏切られた独逸の総統は、自殺直前に女性秘書にベルリンの地下壕から脱出して自分に代わる新たな独裁者に仕えるように助言したそうである。総統と運命を共にしたのは、ナチスの教義に理解を持たず総統に対する尊敬の念もない宣伝大臣の家族だった。共産党を蛇蝎の如く嫌った男が、半生を共産党の教義に理解を示し、家族ぐるみで黨員に忠義を尽くすが如きである。

(註25)「善い哉、由や、恭敬にして信なり」「善い哉、由や、忠信にして寛なり」「善い哉、由や、明察にして断なり」、

子路に会見せず孔子がその政治の事績を称賛する所以を聞く子貢に、孔子は以下の如くにその根拠を示す。「田疇悉く治まり草萊甚だ辟け溝洫は深く整つてゐる。」「民家の牆屋は完備し樹木は繁茂してゐる。」「庭に至れば甚だ清閑で従者僕僮一人として命に違ふ者が無い。」、戦前迄日本人は、悉く支那人を侮蔑し輕視していたが、この風潮が生じたのは日清戦争以後である。日清戦争八年前、長崎に入港した清国北洋艦隊は、弱小日本を見くびって「清国水兵暴行事件」を起こしている。北洋艦隊の主力軍艦鎮遠、定遠は日本を威嚇するもその大砲に水兵の下着が架けられているのを目撃して、日本海軍将校は勝利を確信した挿話がある。威海衛占領の敗北の責任を感じた北洋艦隊の責任者丁汝昌は、服毒自殺をし、遺骸は日本の軍艦により栄誉の礼を以って祖国に帰還した。当時、日清両国の士官の間に漢籍、儒教の共通認識があったからだと思われる。

亜細亜の儒教文化圏、漢字文化圏と言えば中国、朝鮮、日本そして越南である。一時的に同一文化圏同士での共闘が模索されたが、現在では夢物語である。中国の共産化は、日本を巻き込み二十年の泥沼の果てに自由主義勢力の駆逐で達せられた。韓国の独立は、米国の甚大なる犠牲によって保たれているし、越南の共産化を米国は最終的に防げなかった。東亜細亜の共産圏同士は、親密さからは程遠く、米国と日本の影響が下降したら一触即発の状況である。日本と中国、朝鮮との関係は明らかに日清戦争以前に戻ってしまった。福沢諭吉の「脱亜入欧」の精神に立ち戻り、人的な交流を制限して反日宣伝の緩和を積極的に展開すべきではないか。朝鮮、中国の国内で繰り返される人民教化の反日教育は、今後百年を閲しても抹殺出来そうにない。そして、日本内部は民族滅亡を画策する宗教集団、政治集団を抱えている。近代百年の歴史の見直しと朝鮮戦争、越南戦争の検証が必要だ。米軍の防衛力がハワイ迄後退した時、東亜細亜は元龜天正の信長時代に戻ってしまうだろう。「裏切られたベトナム革命—チュン・ニュー・タンの証言」(「中公文庫」)を読んで衝撃を受けたのは、随分昔である。サイゴン陥落時南ベトナム解放戦線の指導者と仲間が、瞬時に逮捕拘束される記録である。国共内戦時、台湾が百万単位の亡命者の受け皿になり、朝鮮戦争では南朝鮮が辛うじて持ちこたえた。越南戦争では、少数の特権階層のみ米国に逃れ、他の多くの民衆は海の藻屑になって消えた。中

国東北地方の住民が、悉く満州時代の生活の過酷な事を陳述する姿に、人民中国の思想教育の過酷な事が窺える。日本統治時代の誅伐、誅戮を申し立てる人民中国の住民の姿から垣間見られるのは、生存の為に踏み絵を踏まされている人民の現実である。中国、朝鮮との歴史のすり合わせなど不可能だし、今後の日本の取るべき道は、過去の歴史の検証と自国民の啓蒙教化、国内の反日分子の炙り出しである。対外的には、度を越した反日宣伝に反撃を繰り返す事ではないか。戦時中の名誉ある女子挺身隊と戦場の慰安婦が、混同された結果北朝鮮に依る日本人拉致事件も起きた。無実の南京市民の大量殺人の汚名は、徹底的に晴らさなくてはならない。この虚報の刷りこみに抛り、いずれ日本人の大量殺人に発展する可能性があるからである。現在の日本は、朝鮮、中国に対して文化的に受け身であるが、特別部門の設置で対外的に文化的攻勢に転じるべきである。

(註26)「魯の哀公が西の方大野に狩して麒麟を獲た頃、子路は一時衛から魯に歸つてゐた。其の時小邾の大夫・射といふ者が國に叛き魯に來奔した。子路と一面識のあつたこの男は、『季路をして我に要せしめば、吾盟ふことなけん。』と言つた。」「(弟子)十五、この辺の記述は典拠をなぞっている。「十有四年春、西に狩して麟を獲たり。小邾の射、句驪を以て來奔す。夏四月、齊の陳恒、其君を執へて舒州に賓く。」、以下は冉有と子路の会話「千乗の國、其盟を信ぜずして、子の言を信ず。子、何ぞ辱とする。」「魯、小邾に事あらんときは、敢へて故を問はずして其城下に死せんも可なり。彼は不臣なり。而るに其言を濟さしむるは、是れ之を義とするなり。由は能はず」(「春秋左氏傳」哀公下)

「季路をして我に要せしめば、……」亡命者である射の発言の依拠しているのは、冉有の発言である。さらに他国者である射が、小邾から魯に亡命したのは、「論語」(顔淵篇第十二)「諾を宿するなし」(三好行雄脚注(承諾したことはその日のうちに果し、翌日にまわすことはしなかった)の意)の子路の発言が、他国に知られていたからである。この一篇の挿話で知られるのは、支那が人治の国で法治の国でない事である。生活が、人治で保たれている事は英領香港などで現在でも言える。法治の国である米国も大東亜戦争敗北後には、事後法で敗戦国日本の指導者を裁いた。東京裁判で被告席に座った笹川良一は、事後法で裁かれて死刑判決を受けた毛沢東の妻江青の日本亡命に協力を

申し出た事があった。自分を頼った亡命者である射の受入れを拒否したのは、子路が支那人的な発想から外れている事の証明である。映画「ラスト・エンペラー」には、皇帝溥儀の側近で国家予算を着服する品性劣悪なる植民地住民の古い体質の支那人が登場していたが、国民党に付着する劣悪なる人格を払拭する事に人民中国が、貢献した事は確かである。私的な経験では、私が学問を志して大学に籍を置く事になったのは、芥川龍之介、中島敦等と同じ経歴を有する二人の教授の支援に拠る。つまり、第一高等学校、東京帝国大学卒業という現在の日本では、消滅してしまった階層の人達の御蔭である。大学人になってから遭遇した同僚は、残念ながら雪隠で饅頭まんじゅうを食って育った人達であった。私を研究職に送り込んだ二人の教授と次の世代の人達との顕著な違いは、男だけの世界で切磋琢磨したかどうかである。前者は、その代償として女との陥穽かんせいに墮ちる危険を帯びた存在である。第一高等学校、東京帝国大学の経歴を有する教授の警咳に接した最後の世代が、私である。戦時下、南京に親日派の汪兆銘政権を樹立し、敗戦後亡命した陳公博、その世話をした近衛文麿や犬養健もこの種の階層の人達である。張愛玲の愛人であった胡蘭成が、日本に亡命し天寿を全う出来たのは、犬養健の存在が大きい。現在の日本は、難民の大量受け入れを政府主体で実行出来ても、個人として政治亡命者を受け入れ、その人生を全うさせる人物は、皆無である。明治生まれの知的エリートの存在は、芥川龍之介や中島敦の文学周辺に残されるのみと成った。声が大きくて姿勢が良い、独逸語を教養とする知的集団は、日本から消えてしまった。

(註27)「同じ年、齊の陳恆がその君を弑した。孔子は齊戒すること三日の後、哀公の前に出て、義の爲に齊を伐たんことを請うた。請ふこと三度。齊の強さを恐れた哀公は聴かうとしない。季孫に告げて事を計れと言ふ。季康子がこれに賛成する譯が無いのだ。孔子は君の前を退いて、さて人に告げて言つた。『吾、大夫の後に從ふを以てなり。故に敢て言はずんばならず。』」(「弟子」十五)、この辺の記述も典拠をなぞっている。「孔丘、三日齋して、齊を伐たんことを請ふ。三たびす。(中略)『陳恆、其君を弑して、民の興せざる者半ばなり。魯の衆を以て齊の半に加へば、克つべきなり。』公曰く、『子、季孫に告げよ』と。孔子辭す。退きて人に告げて曰く、『吾が、大夫の後に從へるを以て、故に敢て言はずんばならず』と。」(「春秋左氏傳」哀公十五年)、この場面「論

語」(憲問第十四)では哀公の発言は、「夫の三子者に告げよ」(三子は、季孫、孟孫、叔孫の三家でこの三家に相談せよ)となっている。

「論語」(憲門第十四)の孔子の発言は、魯の国が哀公の手を離れ、三子の支配下にある事を知っていて形式的に異議を唱えた訣である。現実的な政治家としての孔子の行政的な気配りを子路が、嫌った訣である。他国に言質を取られない爲に大東亞戦争末期、側近の繆斌ミヤオビシを帝国日本に派遣し、単独講和を模索した蒋介石の支那人的な発想は、帝国政府に受入れられなかった。当時の日本の支那漢籍に対する理解は深かったが、現実に中国人の発想を理解する人材に欠けていた。カイロ会談以後、連合軍の一員から外され、ソ連の対日参戦の情報を得た蒋介石は、単独日本との和平の画策に乗り出した訣である。同時期、延安の劉少奇から上海の汪兆銘政権に、局面打開の打診があった。こうした支那人特有の表裏一体となった政治攻勢に敗戦直前の帝国政府は、積極的に対処する人材を欠いていた。ヤルタ会談の情報を得ながら空手形の日ソ中立条約を頼みに、近衛特使派遣を共產主義国家に打診していた。繆斌の和平工作に積極的に加担したのは、戦時下「戦国策」を読んでいた東久邇稔彦ひがしく になるひこである。一兵士として支那大陸に出征した富士正晴は、司馬遼太郎に全支那大陸を走破したと語った。戦時下の皇軍兵士に取っては、戦後捕虜虐待として有名になった「バターン半島死の行進」は、ピクニックの域を出ないであろう。二千年以前、春秋戦国時代を高い理想を掲げて諸国を行脚する孔子の言行録「論語」自体が、絵にかいた餅である。空理空論でも無いよりは増しだが、その証拠は、儒教文化圏と其れ以外の亜細亞諸国の惨状を見れば自ずと明らかである。黄文雄は、一連の著作で孔子の掲げた理想の幾分かは、日本で達せられたと感想を漏らした。しかし、一日本人の私から見れば、それは自身の属する社会での二、三の仲間内に限られるようだ。職業柄、教授達の退官論文集や回想文、さらには少年期からの自叙伝を読む機会があるが、日本はさながら聖人君主の仁徳の国である。しかし、一步仲間内の秘密結社を離反した者の傍若無人振りは目も当てられない。米国の同窓生が、卒業時に互いに称賛し合う防御協定を結び組織の頂点を極めた話が、識者に抛り指摘されている。この種の秘密結社が、学閥、政治閥、宗教閥として現存しているのが日本社会であろう。組織内で相互の犯罪を隠蔽し合い、互いを絶賛し合う秘

密結社を犯罪者用語で「種族同盟」と言うのである。

(註28)「子路が魯に来てゐる間に、衛では政界の大黒柱孔叔圉が死んだ。その未亡人で、亡命太子蒯聵の姉に當る伯姫といふ女策士が政治の表面に出て来る。一子懼が父圉の後を嗣いだことにはなつてゐるが、名目だけに過ぎぬ。伯姫から云へば、現衛候輒は甥、位を窺ふ前太子は弟で、親しさに變りはない筈だが、愛憎と利慾との複雑な経緯があつて、妙に弟の爲ばかりを計らうとする。夫の死後頻りに寵愛してゐる小姓上りの渾良夫なる美青年を使として、弟蒯聵との間を往復させ、秘かに現衛侯逐出しを企んでゐる。」(「弟子」十六)、衛の国の国情を中島敦は、典拠に拠りながら詳細に記述している。「衛の孔圉、太子蒯聵の姉を取りて懼を生めしむ。孔氏の豎の渾良夫長にして美なり。孔文子・卒して、内に通ず。太子、戚に在り。孔姫、之を使せしむ。」(「春秋左氏傳」哀公十五年)

子路が命を落とす衛の軍事クデターは、衛の靈公の亡命太子蒯聵が政權を奪取し、衛の莊公となる過程で起きた。中島敦「盈虚」に拠れば、衛の靈公の太子蒯聵は、宋の国からの腐れ縁の愛人公子朝を伴って衛の靈公の夫人に納まった、異母暗殺を企て、側近戲陽速により実行するも失敗し共々衛から、宋へさらに晉に亡命する。衛の靈公の没後、実力者である孔叔圉は蒯聵の息子である輒を立て衛公とした。輒の後ろ盾である孔叔圉亡きあと未亡人である姉伯姫が、息子である孔懼を傀儡に立て、弟である蒯聵を衛公として呼び戻す画策をする。蒯聵は、亡命地で得た息子である公子疾と姉伯姫の愛人である渾良夫を伴って故国である衛に帰還する。「周の昭王の四十年、閏十二月某日蒯聵は良夫に迎へられて長驅都に入った。薄暮女裝して孔氏の邸に潜入、姉の伯姫や渾良夫と共に、孔家の當主衛の上卿たる・甥の孔懼(伯姫からいへば息子)を脅し、之を一味に入れてクウ・デ・タアを斷行した。子・衛公は即刻出奔、父・太子が代つて立つ。即ち衛の莊公である。南子に逐はれて國を出てから實に十七年目であつた。」(「盈虚」)、この箇所が子路の悲運に倒れる政權奪取の場面である。「盈虚」での衛の莊公の一代記は、「春秋左氏傳」(「定公」哀公)の典拠に沿った物語展開であるが、莊公の最期を自身の性格悲劇であると設定する爲に中島敦は、酷薄な性格造型を爲す。「明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年餘りの中に、氣まぐれで我が儘だつた白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に成上つてゐた。」というもので

ある。蒯聵の後年の悲劇は、二十年に及ぶ不本意な亡命生活により齎された。個人的には私が、大学の教師になった偶然是第一高等学校、東京帝国大学卒業の知的エリートの助言に拠る。大学人として現実に接した連中は学童疎開の生き残りで、連日、損した損した連呼する人達であつた。私的な感想では、戦争と敗戦で民族が変質したと言えそう。祖国防衛の爲に異国で死ぬ事を命じた海軍、陸軍の高級参謀が、昼の上で天寿を全うした事に遠因がある。フィリピンでの生存の一兵士が、陸軍参謀を罵っている声を聞いた覚えがある。今からでも遅くない、作戦参謀の榮譽を剥奪し、民族再生の爲に責任追及をすべきだ。

(註29)「使者ありて出づ。乃ち入る。曰く、『太子、焉くにか孔懼を用ゐん、之を殺すと雖も、必ず之を繼ぐものあらん』と。且た曰く、『太子、勇なし。若し台の半を燻かば、必ず孔叔を舍さん』と。太子、之を聞きて懼る。石乞・孟賁を下して子路に敵せしむ。戈を以て之を撃ち、纒を斷つ。子路曰く、『君子は死すとも、冠をば免がず』と。纒を結びながら死す。」(「春秋左氏傳」哀公十五年)、子路は最期に孔子の弟子として形から入るといふ儒教の教えを実践して死んだ訣である。孔子の実践的な教義から最も外れた一人の人物が、最期命を賭して、師の教えに殉じた事に注目した点こそ日本人中島敦の手柄である。太閤没後、一身に豊臣家の命運を担い関ヶ原で奮戦した石田三成の存在が脳裏に横切ったか。子路の持つ「純粹な没利害性」を孔子のみが理解を見せている。「この種の美しさは、この國の人々の間に在つては餘りにも稀なので、子路のこの傾向は、孔子以外の誰からも徳としては認められない。」(「弟子」二)、最近では毛沢東死後に、鄧小平により文化大革命が終息したが、政敵に逮捕、拘束、事後法で裁判に引き出された江青、張春橋の二人は、自己の罪を認めなかった。江青は、共産党主席に対する忠誠の遺書を残して自殺しているが、中島敦の支那知識の範囲から判断すれば支那の常識から外れている。

吉行淳之介「砂の上の植物群」(「文学界」昭和三十八年)は、余命幾ばくも無くなった男が自分の愛人の肉体を凶器にして、復讐を企てる作品である。日本の大学では、教授達は自己の保身の爲により無能な弟子を後継者にするそうである。無能な人物、肉体と美貌でけた外れに劣った者にしか採用の道が開かれていない。組織としての大学が、悲劇的な結末を迎える事態は、近いかも知れない。故人と成った国語学の教授は、

大学院入試に失敗した美貌の友人を励ます爲に、醜惡な肉体の男女にのみ大学教授の道が用意されていると訓誡していた。松本清張創作ノートは、専務の爲なら命は要らないと巧言する十名を超える男達の忠誠を記録し、派閥抗争に敗れた後の専務の孤独な人生を描く、会田雄次は退官後に札幌のホテルで会社の上司に忠誠を誓う部下の声を聞き、嗟嘆の声を漏らしている。

孤立無援の他国で子路は、師の教えを実践して死んで見せた。孔子教徒の中で最も優秀な弟子であった事を対外的に知らしめた。何しろ命のやり取りの最中に儒教の教えを自ら演じた訣である。「見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」、主義に殉ずる事で子路は、空理空論であった孔子の教えに火をつけた、社会を動かす実践的な原理に昇華する事に成功したと言える。三島由紀夫の「楯の会」の結成は、私の学生時代の記憶である。露西亞革命、国共内戦の結末から示唆された民間防衛組織は、日本に容共政権が誕生した折の防波堤である。百名の隊員が全国に散って、一人の部員が小隊長と成って百名の有志を募り、死を賭して戦い続ける事で国民の覚醒を促す主旨である。日本共産党の敗退で、自己の掲げた理想が形骸化し、消え去る事を危惧し、行動に出て死んで見せた。空理空論を実践的な原理に棚上げする爲に命を棄てた訣である。周文化の良質の側面を内包している故に秦の始皇帝は、焚書坑儒を実行したのであろう。共産党主席の攻撃は、漢民族から周代以来の伝統を剥ぎ取る行爲であった。つまり、支那民族を別の民族に刷新すべき苦闘であった。人間改造、思想訓練、一文学教師である私が三十年間目撃した現実のそれは、少数の学生を四年間研究室に昼夜を分かたず拘束、教化合宿による理論と実践を兼ねた共産党のオルグ活動であった。醜い女の自意識を破壊し、情緒不安定の学生の精神を頑強なそれに変貌させる事で有効なメスであった。社会に出て行った彼等の信念が、揺らぐ時に真の危機が訪れる訣であるが、それは部外者である私の関知し得ぬ領域である。在学中、共産党の組織細胞として生きた学生に一人の自殺者もなく、一人の神経衰弱者も出なかったのは思想訓練の賜物である。

(註30)「孔子、衛の亂を聞きて曰く、『柴さいや其きたれ來らん。由ゆうや死しなん』と。」「(春秋左氏傳)哀公十五年)、同内容の記録が「史記」(「衛康叔世家」)、「史記」(「仲尼弟子列傳」)にもある。子路の死を予見した孔子の言「柴や其れ來

らん。由や死なん」は、「孔子家語」「春秋左氏傳」「史記」に記録があるが、その後の孔子の行動は、「孔子家語」に拠っている。「既にして衛の使者至る。曰く、子路死せりと。夫子これを中庭に於て哭す。人の弔する者ありて夫子これを拜す。哭を已り、使者を進めて故を問ふ。使者曰く、これを醜みにくにせりと、遂に左右をして皆醜みにくを覆せしめて曰く、吾れ何ぞこれを食ふに忍びんやと」(「果してその言の如くなつたことを知つた時、老聖人は行立瞑目すること暫し、やがて潸然として涙下つた。子路の屍が醜みにくにされたと聞くや、家中の鹽漬類を悉く捨てさせ、爾後、醜みにくは一切食膳に上さなかつたといふことである。)、終始一貫師の教訓に反抗的であった行動派の快男児が、最期は一命を賭してその教えに殉じた一篇の行動記である。思索よりも行動に先走つた無法の男が、儒教の教えを命を棄てて実現した事で、背後の孔子の教師像が浮かび上がる仕組みである。以後、孔子の言動が中華文明の核となるが子路の人物像は希薄になった。「孔子はこの剽悍な弟子の無類の美点を誰よりも高く買つてゐる。それはこの男の純粋な没利害性のことだ。この種の美しさは、此の國の人々の間に在つては餘りにも稀なので」(「弟子」二)、この子路の性格に就いては中島敦の日本人としての批評が付け加えられている。ここには、作者の漢籍の蓄積が窺えるし、支那古典に埋没した古典學者の喪失した斬新な視点があると言える。「子路の屍が醜みにくにされたと聞くや、……醜みにくは一切食膳しじぎひに上さなかつた」、それまでは聖人孔子は、日常的に醜みにくを食した訣で、平凡な一日本人の感覚からする啞然とせざるを得ない。師弟一体となつた一篇の絵画のような行動記で、作品は終結する。思想は、衣装であると言つたのは小林秀雄であるが、国粹的な出版と左翼的な出版を同時に営業している現実がある。松本清張「カルネアデスの舟板」(「文學界」昭和三十二年十二月)の主題であるが、左翼的な歴史学者も利権を求めて瞬時に右翼的思想家に変貌するのが現実だ。映画「ホロコースト」は、思想訓練を経て大量殺人を爲した果てに、思想を支える國家を喪失した者が、個人として自己の罪状に向かい合う物語である。地方の短大に奉職した同僚は、剛腕なる独裁者である理事長の罵声を逃れて公立大学に移り、一公務員としてかつての理事長と対談した経験を語って聞かせてくれた事がある。以下は、私の個人的な視点からの感想である。教室を赤い共産主義の戦場と化した黨員同志は、あるいは互いを同志と呼び合つ

た学生達は、今互いに連絡を取り合い密なる交際をしているのだろうか。終始一貫して師の教えに懐疑的であった一人の男が、命を棄てて師の教訓に殉じた一篇の行状記「弟子」は、今日我々に支那の現実と直面させる。さらに思想とは何かを、我々に語り続ける。子路が生きた春秋戦国時代の過酷な現実を隠蔽する事で、美しい師弟愛を描き切る事に成功したのは、中島敦の日本人としての感性である。中島敦には、「弟子」の裏面物語である「牛人」「盈虚」「妖氛録」のような作品もある。これらは、「弟子」の依拠した「春秋左氏傳」の素材を即物的に生かした無気味な作品群である。殺戮と謀略、そして無残な死を隠蔽した作品「弟子」は、春秋戦国時代の現実を裏面に日本的な感性に訴えた佳作である。孔子に仕える子路の一代記は、日本社会の良質な人間関係を偲ばせる。個人的には、対独協力者を処刑した仏蘭西や現在も暗殺が絶えない中国の現実も捨てがたい。「怒みを匿して其の人を友とするは、……丘も亦之を恥づ。」(「論語」公治長第五)が、蔓延して今日の日本を創ったという個人的な認識がある。

(註31) 生き残った者が、死者との接近をその往時を振り返って痛恨の念で記録する。私的な感想に重なるのは、露西亜二月革命の後に一時的に共和国の首相として君臨し、最後は十月革命でレーニンに権力を譲与したケレンスキーの回想記である。米国在で九十歳の長寿を保った彼は、ペテルブルグ大学法学部の学生時代、クレムリンの宮殿を孤独に歩むニコライ二世を眺望した記憶を痛恨の念で回想している。ちなみに共和国の首相は、一切合財を持って国外に逃亡して最晩年回想記に筆を染めたが、私の記憶に誤りが無ければ閣僚の多くが逃げこなくて皇帝一家と同じ運命を辿った筈である。ケレンスキーの出处進退は、敗戦直前に祖国に帰還した陸軍参謀に重なり、マイナスの遺産を置き土産に組織を離れた大学教授の姿にも重なる。三島由紀夫「蘭陵王」は、露西亜の二月革命から十月革命の短期過渡期の混乱を想定して、一命を賭して祖国に殉ずる少数の同志との武装訓練を回顧した挿話である。

(註32) 「牛人」は、「春秋左氏傳」(昭公四年)の三ページに満たない記録を典拠に中島敦が、焼き直した小品である。この作品の主題が、息子の父親殺しである点が興味を引く。多分、自身の自画像から類推して作り上げられた古代支那を舞台にした殺人事件である。「三造は彼を生んだ女を知らなかつた。第一の繼母は、彼の小學校の終り頃に、生れたばかりの女の子の兒を残し

て死んだ。十七になつたその年の春、第二の繼母が彼のところに來た。」(「ブルの傍で」二)と自身で突き放して書いている通りである。父中島田人と息子中島敦の關係は、折原澄子「兄と私」(「兄とは十四歳の年の開きもあって、親しみというより一種の畏敬に近いものを感じていた。」)に多少その片鱗が窺える。「牛人」の主題は、図らずも「カラマゾフの兄弟」の作品構図をなぞっている。さらに最近の話題に重ねると村上春樹「海辺のカフカ」とも重なる場面がある。

「牛人」の主題の一は、友人氷上英廣からの示唆に拠ると思われるニーチェ「永劫回帰」の思考が見られる事である。魯の大夫である叔孫豹が私生児の奸計で嫡出の息子二人を失い、自分も餓死させられる話である。叔孫豹は、予め天の悪意とも言うべき天の降下を夢で実感する。「見える筈はないのに、天上の上を眞黒な天が盤石の重さで押しつけてゐるのが、はつきり判る。」、この時の夢の中での圧殺は、庶子の牛人の助力で回避できる。しかし最期、牛人の策略、奸計に依り飢餓状態に墮ちた時に救いは來ないのである。「寝てゐる眞上の天井が、何時かの夢の時と同じ様に、徐々に下降を始める、ゆつくりと、併し確實に、上からの壓迫は加はる。逃れようにも足一つ動かさない。……救を求めても、今度は手を伸べて呉れない。」、事前の予知とも言うべき悪意の象徴を夢に拠って知り、さらに確実な自身の肉体の破滅を今度は予兆を保証する確実な事実で知らされる。

叔孫豹と庶子である典拠にない決定的な会話は、以下の如くである。「汝の言葉は眞實か?」「どうして私が偽など申しませう、と答へる豎牛の唇の端が、其の時嘲るやうに歪んだのを病人は見た。」、叔孫豹が最期に自分の側近の正体を知り得たのは、幸福だったかどうか。日本人的な感性では、最期まで眞實を隠蔽して死なせる事が妥当であろう。太閤は、死ぬまで徳川家康を信頼して後顧を頼んで死んだ。学問の蓄積が、この種の透視能力を激減させる事の不幸を中島敦は、作品で繰り返して記述する。私的な経験でも、膨大な業績目録を顕示した老教授の識見の無い事、人間観察能力の劣悪な事は驚くばかりである。

(註33) 「盈虚」も「牛人」と同じく「春秋左氏傳」を典拠にしたものであるが、こちらは後者が「昭公四年」の一挿話に拠るとの違い、崩壊に関する散在する記録を使っている。この小品にも永劫回帰の運命の軌跡が見られる。崩壊は、自己の悲劇的な最期の暗示を予兆で自覚

し、最期に肉体でそれを目視する事に成る。最初、悪夢に驚された朔朧が露台で無気味な月を見る。二度目は、逃亡中に不安を甯す前奏曲のように赤い月を再度目撃する。「遅い月が野の果に出た所であつた。赤銅色に近い・赤く濁つた月である。」「大分歩いた頃、突然空がぼうつと仄黄色く野の黒さから離れて浮上つたやうな感じがした。月が出たのである。何時かの夜夢に起されて公宮の露臺から見たのとまるでそつくりの赤銅色に濁つた月である。」、この作品は「弟子」「牛人」と同じく主人公の性格悲劇としての結末を迎える。

典拠の支那古典は、事実の列挙で個人の感情を感じさせない。しかし、「盈虚」には中島敦の日本人の感性を見せた鋭い記述がある。「明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年餘りの中に、氣まぐれで我が儘だつた白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に成上がつてゐた。」「莊公が位に立つて先づ行はうとしたのは、外交の調整でも内治の振興でもない。それは實に、空費された己の過去に對する補償であつた。或ひは過去への復讐であつた。」、これなどは半生を大学の貴公子、学会のプリンスと称賛された学童陳開の生き残りの教授たちの雪隠で餓頭を食う浅ましい姿を目撃して来た私には、身につまされる記述である。これに反して明治生まれの旧制高校、帝国大学卒業の教授の優雅な物腰が思い出される。何度も家族を殲滅された毛沢東が、終始意気軒昂である事を称賛した一文を読んだ記憶が蘇る。生涯国民党員であった故人と成った中国文学の教授は、文化大革命に終始批判的であつたが、七十を過ぎても意気軒昂で「われわれのこの党を罰する」肅清劇、文化大革命に乗り出したその豪胆振りを称賛していた。

(註34)「妖氛縁」は、従来草稿として全集に収録されていた。「春秋左氏傳」を典拠にしたこの小品に注目し、「弟子」「牛人」「盈虚」に連なる意義を解説したのは、村田秀明「中島敦『弟子』の創造」(『明治書院』平成十四年十月)である。「陳の靈公が臣下の妻と通じその女の肌着を身に着けて朝に立ち、それを見せびらかした時、洩冶といふ臣が諫めて、殺された。」「(弟子)十二)、という挿話になっている夏姫に纏わる小品の典拠を提示して、この草稿「妖氛縁」が「古俗」二篇(「牛人」「盈虚」と同列の作品であると評価している。「陳の靈公、孔寧・儀行夫と與に、夏姫に通ず。皆、其相服を衷にし、以て朝に戯る。洩冶諫めて曰く、『公卿、淫を宜さば、民效ふこと無からんや。且つ聞令からず。君、其れ之を納めよ。』

公曰く、『吾能く改めん』と。公、二子に告ぐ。二子、之を殺さんと請ふ。公、禁ぜず。遂に洩冶を殺す。」「(春秋左氏傳)宣公九年)とある記載事実を基に中島敦は、以下の如く記述する。「或る時、靈公が朝にゐて、上卿の孔寧と儀行父とに戯れ、チラリと其の相服を見せた。媚めかしい女ものの肌着である。」「洩冶といふ鯁直の士が靈公に直言した。」「併し、孔寧、儀行父の二人が、上を畏れざるの臣は除かねばならぬと主張した。靈公も強ひては止めない。翌日、洩冶は何者かに刺されて斃れた。」「(妖氛縁)」と云うのが、中島敦の筆になる創作個所である。

「弟子」が、一個の華麗な美的な絵巻であるなら「牛人」「盈虚」「妖氛縁」は現代に通じる支那の現実を暴露した小品である。中島敦が、支那社会の本質を衝く作品を作り得たのは、支那学に対して素人の関心で接した爲と思われる。赴任先のにめり込んだ外交官や聖人の言行録を盲信した専門家の狂信から、遠い立場にいた事が幸いしたと言える。昨日、私は大城立裕の東亜同文書院時代の講演を聞いた。戦時下の日本では、一般的な知識として中国共産党の知識が無かったと云う趣旨の発言が記憶に残った。